

ジョセフ・E・スティグリッツ教授講演会  
Special Seminar by Professor Joseph E. Stiglitz

グローバル化の中の途上国開発と日本への期待  
**Making Globalization Work  
for Developing Countries**

JICA/JCER共催セミナー報告書



グローバル化の中の途上国開発と日本への期待 Making Globalization Work for Developing Countries



2007年7月  
July 2007

独立行政法人 国際協力機構 国際協力総合研修所  
Institute for International Cooperation  
Japan International Cooperation Agency

総 研

J R

07-17

ISBN4-903645-35-5

2007年7月 国際協力機構

国際協力機構（JICA）・日本経済研究センター（JCER）共催セミナー報告書  
JICA/JCER Joint Seminar

ジョセフ・E・スティグリッツ教授講演会  
「グローバル化の中の途上国開発と日本への期待」  
**Special Seminar by Professor Joseph E. Stiglitz**  
**"Making Globalization Work for Developing Countries"**

2007年7月

July 2007

独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研修所  
Institute for International Cooperation  
Japan International Cooperation Agency

本報告書および他の国際協力機構の調査研究報告書は、当機構ホームページにて公開しております。なお、本報告書に記載されている内容は、国際協力機構の許可無く転載できません。

This report is available in PDF format from the JICA website. The contents of this report may not be reproduced without permission of JICA

URL: <http://www.jica.go.jp/>

---

発行：独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研修所 調査研究グループ

〒162-8433 東京都新宿区市谷本村町10-5

FAX: 03-3269-2185 E-mail: [iictas@jica.go.jp](mailto:iictas@jica.go.jp)

Research Group, Institute for International Cooperation (IFIC),

Japan International Cooperation Agency (JICA)

10-5 Ichigaya Honmura-cho, Shinjuku-ku, Tokyo 162-8433 Japan

---

## 目次

◇ プログラム	1
◇ 日本語版 講演録/Seminar Report : Japanese Version	3
● 開会挨拶	5
● 基調講演：ジョセフ・E・スティグリッツ教授 「グローバル化の中の途上国開発と日本への期待」	7
● パネルディスカッションおよびフロアとの主な意見交換	19
◇ 英語版 講演録/Seminar Report : English Version	35
● Opening Address	37
● Keynote Speech : Professor Joseph E. Stiglitz "Making Globalization Work for Developing Countries"	40
● Panel Discussion and Question & Answer	55
◇ 配布資料/Hand out	73

ジョセフ・E・スティグリッツ教授講演会  
「グローバル化の中の途上国開発と日本への期待」  
Special Seminar by Professor Joseph E. Stiglitz  
“Making Globalization Work for Developing Countries”

日時：平成 19 年 7 月 31 日 16:00～18:00

会場：国際協力機構（JICA）国際協力総合研修所 2 階国際会議場

Date and Time: July 31, 2007, 16:00～18:00

Venue: International Conference Hall at the Institute for International Cooperation, JICA

<プログラム>

16:00-16:05 主催者挨拶：緒方貞子 国際協力機構（JICA）理事長

16:05-16:45 基調講演：ジョセフ・E・スティグリッツ コロンビア大学教授

16:45-17:30 ディスカッション：

コメンテーター

小林陽太郎 富士ゼロックス（株）相談役最高顧問／経済同友会終身幹事

白石隆 アジア経済研究所所長／政策研究大学院大学副学長・教授

モデレーター

小島明 日本経済研究センター会長

17:30-18:00 フロアとの意見交換

<Program>

16:00-16:05 Welcome Address: Dr. Sadako OGATA, President, JICA

16:05-16:45 Keynote Speech: Dr. Joseph E. STIGLITZ, Professor, Columbia University

16:45-17:30 Discussion:

Commentators

Mr. Yotaro KOBAYASHI, Chief Corporate Advisor of Fuji Xerox Co., Ltd.,

Life-time Trustee, Japan Association of Corporate Executives

Dr. Takashi SHIRAIISHI, President, Institute for Developing Economies-JETRO,

Vice President and Professor, National Graduate Research Institute for Policy Studies

Moderator

Mr. Akira KOJIMA, Chairman of the Japan Center for Economic Research(JCER)

17:30-18:00 Discussion with the participants

## <講師略歴／Brief Biography of the Keynote Speaker>

### ジョゼフ・E・スティグリッツ

1943年2月9日米国インディアナ州ギャリー生まれ。アムハースト大学卒業後、1967年にマサチューセッツ工科大学で経済学博士号取得。1970年からイェール大学教授。プリンストン大学、スタンフォード大学、マサチューセッツ工科大学、オックスフォード大学オールソウルズ・カレッジで教鞭を取る。世界の37大学から名誉博士号を授与されている（日本では早稲田大学、同志社大学）。

2001年に情報の非対称性を伴った市場の分析への貢献からノーベル経済学賞受賞。

クリントン政権下では米国大統領経済諮問委員会委員（1993～97年。95～97年は委員長）を務めた後、世界銀行上級副総裁兼首席経済学者（1997～2000年）。

現在は、コロンビア大学教授、コロンビア大学グローバル思考委員会委員長、コロンビア大学政策対話イニシアティブ代表。また、マンチェスター大学役員会代表、ブルックス世界貧困研究所サマー・プログラム代表を兼任。

著書『世界を不幸にしたグローバリズムの正体（*Globalization and Its Discontents*）』は35言語に翻訳され、100万部以上の売り上げを記録。近著には『人間が幸福になる経済とは何か（*The Roaring Nineties*）』『フェアトレード—格差を生まない経済システム（*Fair Trade for All*）』（共著）、『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す（*Making Globalization Work*）』等。

### Joseph E. Stiglitz

Joseph E. Stiglitz was born in Gary, Indiana in 1943. A graduate of Amherst College, he received his PhD from MIT in 1967, became a full professor at Yale in 1970. He has taught at Princeton, Stanford, MIT and was the Drummond Professor and a fellow of All Souls College, Oxford. He is now University Professor at Columbia University in New York and Chair of Columbia University's Committee on Global Thought. He is also the co-founder and Executive Director of the Initiative for Policy Dialogue at Columbia. In 2001, he was awarded the Nobel Prize in economics for his analyses of markets with asymmetric information.

Stiglitz was a member of the Council of Economic Advisers (CEA) from 1993-95, during the Clinton administration, and served as CEA chairman from 1995-97. He then became Chief Economist and Senior Vice-President of the World Bank from 1997-2000.

Recognized around the world as a leading economic educator, he has written textbooks that have been translated into more than a dozen languages. He founded one of the leading economics journals, *The Journal of Economic Perspectives*. His book *“Globalization and Its Discontents”* (W.W. Norton June 2001) has been translated into 35 languages and has sold more than one million copies worldwide. Other recent books include *“The Roaring Nineties”* (W.W. Norton) and *“Fair Trade for All”* (Oxford University Press), with Andrew Charlton. His newest book, *“Making Globalization Work”*, was published by WW Norton and Penguin/Allen Lane in September 2006.

日本語版 講演録

Seminar Report: Japanese Version

## 開会挨拶

**加藤宏 (JICA 国際総合研修所所長)** : 本日は、日本経済研究センター及び JICA 共催により、「ジョセフ・スティグリッツ教授講演会」に多数ご来場いただきまして誠にありがとうございます。ただいまから講演会を始めさせていただきます。最初に、主催者を代表いたしまして、独立行政法人国際協力機構 (JICA) 理事長の緒方貞子よりご挨拶を申し上げます。

**緒方貞子 (JICA 理事長)** : 本日は、日本経済研究センター及び JICA 共催によるジョセフ・スティグリッツ教授講演会にご来場いただきまして誠にありがとうございます。スティグリッツ教授に対しては、本日の講演をお引き受けいただきましたことを感謝申し上げます。また、コメンテーター及びモデレーターとしてご参加いただきました三氏に対しても御礼申し上げます。

スティグリッツ教授の簡単な略歴をご紹介します。アムハースト大学をご卒業後、マサチューセッツ工科大学で経済学博士号を取得され、その後オックスフォード大学、イェール大学等々で教鞭をとられた後、2001 年に非対称性を伴った市場の分析への貢献からノーベル経済学賞を受賞されました。その後、クリントン政権下で、大統領経済諮問委員会の委員、その後、世界銀行上級副総裁兼首席経済学者を務められました。

現在は、コロンビア大学教授、コロンビア大学グローバル思考委員会委員長、コロンビア大学政策対話イニシアティブ (IPD) 代表、またマンチェスター大学役員会の代表をされております。そして先生のご著書『世界を不幸にしたグローバリズムの正体』については皆様もよくご存じであると思います。

今回、先生をお招きいたしましたのは、来年 10 月に JICA は国際協力銀行 (JBIC) の円借款部門との統合が予定されているからです。新 JICA は、二国間援助機関としては規模が世界最大となることが予定されております。JBIC と JICA との統合が、単なる二機関の間の足し算に終わることなく、シナジー効果を十分最大限生むように努力していきたいと思っております。

研究部門については、これを強化されることが期待されております。JICA 国際協力総合研修所と、JBIC の開発金融研究所を統合し、新研究所を設立することが予定されております。新研究所は、現場の経験と知見を最大限に活用した調査研究を行い、開発援助のシンクタンク機能を担える機関となることが予定されております。

新 JICA が、途上国開発をめぐる国際社会における議論に積極的に貢献できるよう、発



信能力を強化していきたいと考えております。現在、JICA ではいくつかのテーマに絞り、国際的な研究者と連携を取りながら、研究プロジェクトを進めるなど、国総研の機能強化に取り組んでおります。

そして、その最初の取組みとして、今回の公開セミナーを開催させていただきました。スティグリッツ教授と IPD との協力、そしてその支援に期待しております。2008 年は新 JICA の誕生の年となるわけですが、それに先立って第 4 回アフリカ開発会議 (TICADIV) が 5 月に日本で開催されます。また G8 のサミットも日本で主催される年になっております。その意味で、来年は日本がリーダーシップを発揮することができる年と考え、そしてこれは日本にとって絶好のチャンスであると認識しております。

グローバリゼーションという大きな世界の潮流を踏まえ、本日のセミナーで、グローバリゼーションと途上国開発について、有意義な議論が行われることを期待しております。皆様方からの積極的なご参加をいただくことを期待しております。皆様、ようこそお出ましくございました。ありがとうございました。

**加藤**：ありがとうございました。これからの進行は、日本経済研究センター会長でいらっしゃる小島明様にお願いいたします。小島様、どうぞよろしくをお願いいたします。

**小島明（日本経済研究センター会長）**：まず、基調講演をジョセフ・スティグリッツ教授をお願いいたします。今、詳細なスティグリッツ教授の紹介がありましたが、彼は 10 年前、アジア危機が起こった 1997 年から世界銀行でアジアを見ていらっしゃいました。とりわけアジア危機の初期段階で、IMF のやり方はおかしいということを盛んに言い出しました。今はハーバードに戻っているロゴフ教授が、当時は IMF のチーフ・エコノミストでしたので、スティグリッツさんとロゴフ教授が Web サイトで大変な論争をやっていたのを、私は楽しく拝見しました。

どちらが勝ったかというのは明らかだと思います。その後 2001 年にノーベル経済学賞をいただいたということですから、グローバルな軍配はこちらに上がったということだと思います。アジアについても、そのような観察を現場でされていまして、政策のアドバイスもされたということもあります。本日のテーマとしては最適のスピーカーということでもあります。それでは、40 分程度を目処に、スティグリッツ教授のお話を伺います。

## 基調講演 「グローバリゼーションの中の途上国開発と日本への期待」 ジョセフ・E・スティグリッツ教授

本日ここに来られましたことを大変うれしく思います。今回の講演のテーマは、“Making Globalization Work for Developing Countries”（「グローバリゼーションの中の途上国開発と日本への期待」）ですが、このテーマに私がここでお話しすることの大部分が要約されています。“Making Globalization Work”（グローバリゼーションを機能させる）というタイトルは、それがうまく機能していないことを示しています。事実、先進国にとっても途上国にとってもグローバリゼーションはうまく機能していません。

しかし、“Making Globalization Work”には、グローバリゼーションを管理する方法を改革することによって、うまく機能するかもしれないという楽観的な響きもあります。したがって、本日は途上国のグローバリゼーションの成功と失敗の側面、そしてグローバリゼーションの成功の可能性を高めるための管理方法に対する改革についてもお話をしたいと思います。

グローバリゼーションの成功について話をする際には、中国とインドの話から始めなければなりません。1960年代初頭に日本がリードした東アジアの奇跡の国々に追随して、合わせて24億の人口がある2カ国が、歴史的にも類を見ないペースで成長を遂げています。この成長のペースは非常に素晴らしいものです。中国は10%近い成長率を30年維持しています。インドは5~6%の成長を25年間続け、ここ数年は8%あるいはそれ以上の成長率を維持しています。事実、この2カ国は、世界の経済成長のエンジンとなっています。世界経済はここ2、3年5%近くの成長を続けています。この成長は過去数十年に見られない成長です。この成長は、日本やアメリカ、ヨーロッパによるものではなく、これらの新興諸国の成長が基盤となっています。

世界が非常に早く変わるということは、しばしば忘れられがちですので、それでは、少し時間を割いて歴史的な側面を見てみましょう。1820年、中国は世界のGDPの3分の1を占め、インドは15%以上を占めていました。この図（配布資料76ページ下の図）は世界のGDPがどれ位であったかを数百年にわたって見ているものです。あまり信頼のおける数字ではないのですが、大きく外れてはいないと思います。この図が示しているのは、先ほど申し上げましたとおり、1820年に中国は世界のGDPの3分の1近くを占め、インドは15%を占めていたということです。インド、中国とも1820年以降急速に衰退し、今は回復しているわけですが、それでもまだ一部しか回復していないということです。この衰退は偶然ではありません。これは技術の革新と経済政策の変化の結果です。産業革命を

起点に、意図的な行動により、英国やその他の国は、インドの輸出を抑え込もうとしました。インドの繊維の輸出は10年のうちに3分の2に落ち込みました。インドはそれまで繊維の主要な生産国でしたが、イギリスから繊維を輸入する国になってしまいました。これは政策が大きな違いを招くことを示しています。

このことはソフト面の政策だけではなくて、軍事政策も同様でした。ヨーロッパの大国はアヘンの開放を求めて、中国を攻撃しました。中国は、瀬戸物やヨーロッパの欲しい商品を輸出していました。しかし、ヨーロッパには中国の欲しい商品が何もありませんでした。そのため、中国でアヘン中毒を引き起こせば、売る物ができると考えたわけです。世界の歴史において悲しい時期でした。

グローバリゼーションは、輸出主導型の成長と、新しい技術の導入によって、中国、インドの成功に大きな役割を果たしました。グローバリゼーションは、ここでは経済のグローバリゼーションを意味し、通信コストあるいは輸送コストが下がったこと、さらには貿易、サービス、資本、人、思想、知識に対する人工的な障壁が減ることによる、世界経済のより緊密な統合を示します。電気通信コストは1990年代に急速に下がり、毎年50%ずつ安くなりました。これはグローバリゼーションの成功の側面です。グローバリゼーションの問題については後で触れますが、成功した重要な側面を忘れてはなりません。

しかし、グローバリゼーションに関しては多くの課題もあります。それはグローバリゼーションの結果とその過程から生じており、私はその両方についてお話したいと思います。

東アジアの成功、そしてその他の地域の失敗は、非常に対照的です。例えば、それはラテン・アメリカ諸国を見ればわかります。ラテン・アメリカ諸国は、過去には世界銀行やIMFが世界に推し進めた政策であるワシントン・コンセンサスの優等生でした。1990年代、世界銀行、IMFのアドバイスはとて忠実に守られましたが、ラテン・アメリカ諸国は80年代の成長率の半分に落ち込んでしまいました。ブラジルは1980年まで75年間にわたって、毎年5.7%の成長を続けていましたが、世界銀行やIMFのアドバイスを聞くようになってからその成長率は下がってしまいました。今は2%や3%の成長を遂げることができれば、成功とみなされるようになってしまいました。75年間も6%近くの成長を遂げたことは、すでに忘れられてしまっています。この地域全体が、貧困、失業、犯罪、そして人口の多くが労働保護のないインフォーマル・セクターに属しているという問題にあえいでいます。成長から生まれたものは主に高所得者層に行ってしまっています。

この25年間を見ると、アフリカでは1人当たりの所得が低下しています。その中で良いニュースは、過去2、3年その所得の下げに歯止めがかかったということです。忘れてはならないのは、この変化の理由は何かということです。アフリカの過去2、3年の成長、

そしてその成長を持続させることができるかという点にも、後ほど時間があれば触れたいと思います。

トーマス・フリードマンというアメリカ人が、『フラット化する世界』というとても有名な本を書きましたが、私は世界はフラットではない、ということを強調したいと思います。彼は、新しい技術により、平らな土俵（市場）が世界に形成されて、途上国は平等な形で先進工業国と競争できると言っています。明らかに彼が焦点をあてているのは、グローバルな地理学が変わったという事実です。確かに中国とインドはもう競争力が付いています。しかしながらアフリカは、ある意味、それほどの競争力がありません。新しい技術を利用できるだけの資源も教育基盤もないわけです。世界はフラットではなく、むしろ逆フラット化しているのです。国家間の不平等が拡大していますし、世界のほとんどの国で国内の不平等も拡大しています。グローバリゼーションは、この失敗に大きな責任があります。

先進国間で不平等が拡大していることは、50年以上前に、経済理論により予想されていたことです。わかりやすいように、例えば次のような1つの思考の実験をしてみましょう。これは、グローバリゼーションを擁護する人たちは、はっきりと言っていないことですが、「全世界の国の完全な統合があつて、市場も完全である」ということはあり得ないわけですが、もしこのようなことがあつたならば、世の中はどのようになるだろうかということです。それは、未熟練労働者が、世界のどこにいても同じ賃金を支払われるということです。日本、イギリス、アメリカの未熟練労働者が、中国やインドでも同じ賃金を得ることになり、今よりも賃金レベルがはるかに下がります。これが完全なグローバルな統合の意味することです。現在は、そこにはほど遠い状態にありますけれども、私の教師であるポール・サミュエルソン氏は、完全なグローバリゼーションではないとしても、貿易の自由化が進めば、未熟練労働者の賃金が下がり、不平等が拡大する方向に動くということを示しています。

それから、途上国にとって不公平な貿易条約も問題を悪化させています。これらの問題は非対称な自由化から作られたものであります。私たちは労働よりも資本のフローの自由化、労働集約財より資本集約財のフローを自由化することに、かなりの努力をしてきました。これは何を意味するかというと、資本の交渉力が労働に対して増加したということなのです。なぜならもし税金が上げられたり、賃金が高すぎたりすれば、資本家は「もっと良い条件の所に移動しよう」と言えます。労働者はそのようなことは言えませんし、特に未熟練労働者は移動することができないのです。交渉力の関係が変わってしまったのです。交渉力の関係が変わることによって、未熟練労働者の賃金がさらに下がるような状況は世

界各地に見られます。

先ほど申しましたように、グローバリゼーションが失敗に寄与した理由の1つは、開発に対して間違ったアドバイスが与えられたことです。ラテンアメリカ諸国は、IMFや世界銀行のアドバイスに従いました。例えばアルゼンチンはA+の優等生でした。しかしながら、アルゼンチンの経済危機の後、ラテンアメリカの他の国々は、「A+の優等生がこうなるのだったら、我々はその学校に行くのをやめよう」と言ったのです。驚くべきことに、アルゼンチンはIMFを追い出し、債務不履行の後、4年以上8%の成長を遂げたわけです。過去のレベルに戻ったばかりでなく、危機以前のレベルを上回る成長を達成したわけです。移行国でもワシントン・コンセンサスに従った国と、従わなかった国とがあったわけですが、従わなかった中国、ベトナムは大きく成長しました。

それからアフリカについて触れなければなりません。アフリカは植民地後の世界においても、搾取され続けています。先進国は、これらの国々から資源を採取しています。しかしながら、教育を強化したり、技術を与えたりはしていません。つまり、長期的な経済成長をもたらすようなことは何もしていないわけです。

それでは、グローバルな構造、経済的な構造により特有な問題に触れていきたいと思えます。1つは金融の問題です。グローバリゼーションは、より高度化した市場、より洗練された市場経済により、安定をもたらさだろうと思われましたが、実際はむしろ不安定になっています。過去30年間に100の金融危機がありました。金融危機がない国の方が珍しいわけです。東アジアは最も悪名高い金融危機を経験しました。しかしながら、それは過去30年間のたくさんある金融危機の1つにすぎません。

同じく懸念されるのが、お金が貧しい国から富める国に流れていることです。去年は5,000億ドルが途上国から先進国に流れています。富める国から貧しい国に行くはずのお金が逆になっているわけです。これは誤った方向です。経済理論によると、富める国はよりリスクを吸収できます。しかし、リスクについていろいろ掘り下げた研究がなされているにもかかわらず、貧しい国はまだリスクにあえいでいます。貧しい国は短期的に、強い通貨の借り入れを行う傾向にあります。為替レートが変化し、金利が上昇した時、負担が彼らにかかってしまうという状況なのです。そしてそれが世界に多くの金融危機が発生する理由の1つです。

先進国は、自己の利益を守るため多くのことをしてきました。二国間の投資協定や二国間の貿易協定の一環としての投資協定を数多く締結し、投資家の利益を守ろうとしました。しかしながら、環境を守るなど途上国の利益を守るようなことはあまりしませんでした。多国籍企業は、有限責任という傘の下に天然資源を採った後は、自らを保護するようなこ

とをしているわけです。

貿易の側面においては、前にも申し上げたとおり、国際貿易制度は途上国に不公平にできていますが、このことの重要性がしばしば理解されていません。1994年に締結されたウルグアイ・ラウンドのアジェンダを見ていただきますと、完全に先進工業国の利益に重点が置かれていることがわかります。ウルグアイ・ラウンドの主要な進展としてサービス分野が挙げられます。通常、サービス分野は労働集約的であり、開発途上国は労働力が豊富にあります。ただウルグアイ・ラウンドのサービスは、この意味でのサービスではなく、先進国が輸出するタイプのサービスです。例えば IT や金融サービスを意味しています。海運、建設業のような未熟練な労働集約的で途上国に比較優位のあるサービスを意味していたのではなかったのです。このように、ウルグアイ・ラウンドのアジェンダを見れば、専ら先進国の利益に集中していたことがわかります。

4つの問題がウルグアイ・ラウンドの当初に話し合われています。途上国は、農業補助金と繊維の問題についてなんとかしてほしいと言っていました。先進国は、知的財産権、これはそもそも協定に入れるべき問題ではなかったのですが、それと金融サービスを盛り込むことを要求しました。結果、先進国は欲しい物を手にしました。けれども途上国は農業補助金の削減を手にすることはできませんでしたし、繊維については10年待つようにと言われて、10年待った後、さらにまた待つようにと言われたのです。ほとんどの利益が先進国に行ってしまいました。このことは別に驚くべきことでもないのですが、問題なのはサブサハラアフリカ諸国を含めた最貧国の状態がもっと悪化したことです。

途上国に対する不均衡が生じていることや、貧しい国に不利益なシステムを強調する事実として、先進国である OECD が貧しい国の商品にかけている関税は、その他の OECD 諸国からからくる商品の関税に比べて4倍ほど高くなっていることがあります。例えば、モンゴルのような小さな国の輸出品にかけられる関税は、フランスのような国の関税より高くなっています。関税の構造自体が途上国に対して差別的であり、先進国に有利にできています。富める国の貿易制限により、彼らの開発援助すべての3倍ほどのお金が貧しい国から富める国へ行っているわけです。

農業補助金の問題も進展はありませんでした。しばしばジョークで、「アメリカのトウモロコシ農家はワシントンで働いている」と言われますが、畑を耕して得られる収入よりも、ワシントンからの収入の方が多いいということです。

ウルグアイ・ラウンドは非常に不公平でしたので、これらの問題に対応するために開発ラウンドが必要となったのです。しかしながら、実際に実現したのは開発ラウンドではなかったのです。先進国が新しいボトルに古いワインを入れたにすぎないのです。むしろ、

開発ラウンドは、反開発ですらありました。新しいボトルに古いワインを入れたばかりではなく、さらに問題なのは、アメリカや EU がその約束を破ってしまったのです。その結果、開発ラウンドは開発ラウンドと呼ぶに値しませんでした。

途上国が開発ラウンドを拒否したという結果は、驚くべきことではありません。インドとブラジルは、「我々はこの協定を締結しない」と言いました。この混乱に対して、誰のせいで失敗したかということが議論されていますが、私は、先進国、特にアメリカと EU ということで間違いないと考えています。それはなぜかを説明しますと、アメリカは農業補助金を削減することを約束しました。これは補助金を 50%以上引き上げないという提案ですが、このことは 50%は引き上げると理解しなければなりません。さらに、それ以前に、補助金を削減すると言っていたウルグアイ・ラウンドよりすでに 100%引き上げているのです。初めに 2 倍にして、さらに 50%以上は引き上げない、と言ったにすぎないわけです。途上国がこれはあまり正直なやり方ではないと思っても不思議なことではないでしょう。誰が被害を受けるのでしょうか。開発ラウンドの進展を見ますと、開発ラウンドがうまく終了したところで、途上国の利益はとても少ないものにしかありません。

今日対応しなければならないグローバリゼーションのもう 1 つの問題として、知識の問題があります。知識というのは、グローバリゼーションの非常に重要な側面です。前に申し上げましたように、東アジアの成功の基盤の 1 つは、世界各地から知識を学び、それをもとに成長することができたことです。現代の開発の教訓は、途上国と先進国を区別するのは資源の差ではなくて、知識の差であるということなのです。知識の格差を縮小するというのが、開発戦略の主要な部分であります。しかし、不平等な知的財産権制度により、この格差を縮小することができません。そしてウルグアイ・ラウンドでの TRIPS（貿易関連知的財産権）も結果として不均衡をもたらしました。これは知識へのアクセスを縮小させるものです。さらに悪いことに、途上国への救命医薬品へのアクセスが縮小されたということで、何千人という人が死んでいくことになりました。途上国が開発指向の知的財産権制度を求めていることは、決して意外なことではないでしょう。

他にも問題として、地球温暖化があります。グローバルな気候変動の問題です。地球温暖化というのは、まさにグローバルな問題の本質の 1 つでしょう。私たちは 1 つの大気を共有しています。しかし、そこでは、グローバルな社会的不平等が行われるわけです。汚染の主要な源は先進国です。二酸化炭素、そして温室効果ガスが前よりも増えたのは、化石燃料が先進国によって燃やされたからです。ただその大きな影響は南の国に見られるわけです。

最後に、このようなグローバリゼーションに対する不満がある理由の 1 つとして、経済

的なもののみによって価値観が支配されたということがあります。短期的な商業的利益のために環境が犠牲になり、救命医薬品へのアクセスが削減されました。途上国の生物学的多様性、炭素隔離のような環境サービスに対しての見返りはありません。発展途上国の伝統的な知識への保護がなく、バイオ・パイラシー（生物資源の盗賊行為）と呼ばれることが起こっています。伝統的な文化が弱体化し、文化に対する助成の能力がなくなっていることも懸念しなければなりません。民主的なプロセスも、IMFのコンディショナリティのようなものによって弱体化されています。

今まで、グローバリゼーションの結果に対して様々な不満が溜まっているということを示し上げてきました。しかし、その過程についても様々な問題があります。それは、意思決定の過程です。その問題は、グローバル・ガバナンスが非民主的なことであり、特に、途上国の声に耳を貸さず、たとえ耳を貸したとしても、しっかりと耳を傾けることがないことです。グローバル・ガバナンスは北の国によって支配されています。即ち、先進国のための、先進国によるルール作り、はっきり言えば、先進国の特定の利益によって支配されています。

最近、世界銀行で何が起こったかについて見ることで、この問題の性格はわかると思います。世界銀行は、開発を推進するための多国的な機関ですが、その総裁はアメリカが決めています。そして彼らは、イラク戦争を立案した人物を総裁に選出しました。このような人物が、世界の貧困のために働く機関の総裁になる資格があると思いますでしょうか。この人が総裁になって、世界銀行に出した課題は、貧困の削減ではなく、汚職の問題でした。汚職の問題は重要です。しかし、彼のやり方そのものが腐敗していました。アメリカ側に付いているような国を選択し、そしてアメリカを困らせなければ、そこでの汚職は無視すると言ったのです。最も有名なのがウズベキスタンの例です。ウズベキスタンは多くの援助を貰っていたのですが、アメリカに対してもう空軍基地はやめてほしいと言ったところ、翌日、ウズベキスタンに汚職があったことがわかりました。他にも彼は、汚職は絶対に許さないといいながら、世界で最も汚職のひどい国に対して、アメリカの同盟国であったからという理由で、支援を拡大しようとしたのです。この結果、多国的なシステムは弱体化し、世界銀行が本来やるべきであった、世界の最貧国の貧困をなくすことから焦点が外れてしまいました。

皆さんは良いガバナンスのことを議論している機関は、良いガバナンスを持っているだろうと思われるでしょう。しかし、総裁を選ぶときに、世界で最も良い資格のある人を探さなかったことで、そうではないとわかるでしょう。彼はアメリカの大統領が望む人でありました。IMFの場合であれば、EUが望む人が選ばれています。これはもう言われ



ていると思いますけれども、ガバナンスの問題からこういうひどい結果が出てきたのだということは強く申し上げたいと思います。

もう1つ認識すべきことは、グローバル・ガバナンスの失敗というのは、私たち先進国の民主主義の弱体化と、特別利益団体が国益を支配していることを、反映しているということです。例えば、綿花に対する補助金です。アメリカの綿花への補助金は、たった2万5,000の綿花農家に行っているだけなのです。私たちはどうして2万5,000の農家のためにそんなに大きな影響を受けなければいけないのかと尋ねるべきです。2万5,000のアメリカの金持ち農家の利益のために、1,000万人のサブサハラのアフリカ人の収入を減らしています。お金のほとんどは1万の農家に集中しています。このような特別利益団体がいかなる役割を果たしているかということはこのことでもわかります。

さらに管理されている状態のグローバリゼーションは、国内の民主的な意思決定の範囲を狭める過度のコンディショナリティのため、民主主義を弱体化させています。このような国の多くは、民主主義はとても重要だと言われていますが、一方で、本当に重要なのは、何も言わないことだと言われ、国際社会がこういうことをやれといろいろ注文を付けています。

まとめますと、グローバリゼーションは私たちの相互依存を高めます。相互依存が高まると、協力した集団行動がより必要になります。世界はグローバルな経済的な機関を必要としていますが、こうした機関に対する信頼は弱くなっています。

根本的な問題を単純に申しますと、経済のグローバリゼーションは、政治のグローバリゼーションよりスピードが速いといえます。民主主義や社会正義、社会の安定、法の支配でさえ、その考え方は国によって違います。私がクリントン政権におりましたときに非常にいい例がありました。私たちは国内の経済政策の問題を話すときに、いつも何が効率的かということに加えて、何が公平かということも話し合います。これが国際的な経済政策になると、公平という言葉は絶対に口にされません。アメリカの通商代表をジュネーブに送り、貿易協定の交渉をさせるときに、公平な貿易協定を取って帰れとは言われません。もしそのようなことをすれば、その人は解雇されてしまいます。アメリカにとってベストな協定を取って帰れということです。これもアメリカの国にとってベストということではなく、選挙に勝てるということによってベストであるということであり、そのようなことが実際にやられてきたわけです。知的財産権も1つの例ですけれども、別の例として、クリントン政権は国内の医療や医薬品に対するアクセスを増やすようにしようとし、それが1992年の選挙において大きな争点でありました。しかし、それがジュネーブでの貿易交渉になると、貧しい国に対してジェネリック医薬品のアクセスを減らすことが焦点になり

ました。全く逆のことをしているのです。これはなぜかといいますと、製薬会社が関係しているわけです。国内においてアメリカ市民は当然、医薬品へのアクセスを求めるわけです。ただ、国際的に医薬品へのアクセスがない人は有権者ではありません。しかし、製薬会社は選挙資金に貢献してくれます。

民主主義は、最大限の個人の利益を確保できるように、市場経済を制御する方法を学習してきたわけですが、しかしながら私たちはこのようなグローバリゼーションの行きすぎをどのように制御すればいいのかということはまだ学習しておりません。グローバリゼーションは国家に、不平等の拡大のような新しい要求を突き付けていますが、しかしながらそれへの対応力は下がってきています。グローバリゼーションがうまく機能しない理由は、いまだに真の民主化されたグローバリゼーションを持ちえていないということです。

ある意味で、冷戦が終結したため、最近事態がますます悪化しているといえます。冷戦時代、先進国は途上国の支持が欲しかったため、途上国に注目していました。コンゴのモブツ政権を支援して、その金がスイス銀行の口座に行っていたこともありました。途上国の開発を進めようとしたのかはわかりませんが、その支持を勝ち取ろうとはしていました。冷戦が終わって、私たちには選択肢がありました。その選択肢というのは、民主主義の原則に基づいた国際的な経済政策に変えるか、もしくは冷戦期のように途上国の支持を得る必要がなくなったため、先進国の多国籍企業が欲しい物を得られるように力を使うかです。不幸にも私たちは間違った選択をしてしまいました。民主主義の原則に基づくものではなく、特別利益団体の原則で決められてしまいました。私たちはグローバル・リーダーシップのチャンスを逸しました。そして偏狭な商業的利益を拡大することを、それもしばしば単独行動主義的な方法も使って、行いました。ここ6年間で事態はさらに悪化しました。

しかし、私が強調したいことは、グローバリゼーションに対する反対というのは、グローバリゼーションそのものに対する反対だということではなく、グローバリゼーションへの管理のあり方に対する反対だということです。先進国の特別利益団体による管理のやり方、経済的価値観が非民主的なプロセスによって他の価値観を支配しているという事実、これらの政策の基礎にあるイデオロギーである市場原理主義や、あるいはワシントン・コンセンサスとして私が申し上げたもの、これらに対する反対であるということです。

グローバリゼーションそのものではなくて、グローバリゼーションの管理のあり方であることを強調する理由は、その変革は可能だということを強調したいからです。実際、変革は不可避です。世界は変わりつつあり、新しいグローバルな地政学があります。今、中国が世界銀行とアフリカ開発銀行を加えたよりも多くのインフラに対する援助を行っております。これは、新しい地政学の一部です。新しい技術、新しい経済、石油の枯渇、気

候変動、グローバリゼーションにより様々な変化が起こっています。例えば、綿花の補助金について交渉が行われていますけれども、WTO の委員会もこのような補助金は違法であると言っています。アメリカは、WTO が違法であると言っていることをまだ続けているわけです。今、アメリカ議会は、このような違法な補助金を続けるための法案を通過させようとしています。問題は、危機が起こる前につきはぎで変更を行い、別の危機が起こる可能性のあるままでいるか、それとも、皆で協力し合ってグローバリゼーションを機能させる、あるいは、少なくとも前より良くさせるかということです。私は『世界に格差をバラ撒いたグローバリズムを正す』という本の中で、グローバリゼーションをもっとうまく機能させる制度改革を提言しています。短く紹介してみます。まず貿易ですが、本当の開発ラウンドを訴えたいと思います。ここで強調したいのは、単に農業だけではなく、もっといろいろな課題があるということです。あまりにも農業に焦点があたりすぎています。他にももっと重要なことがいろいろあります。このスライド（配布資料 88 ページ上）にも書きましたが、先進国が、GDP の 0.7% で貧困国を助けるならば、彼らの収入を得る機会を与えるために自らの市場を開放することも、彼らを助けるためにすべきではないかと思います。私は、最貧国に市場を開放するヨーロッパのイニシアティブを拡大し、一般的マーケット・アクセスがあるべきだと思います。

ここで私は本当の開発アジェンダはどのようなものであるかについて、多くの項目を並べております。財政分野においては、債務免除はさらに行うべきです。しかし、返済不能な債務を抱えている国が多い理由を明らかにしなければ、また起こってしまいます。途上国に対してその金利や為替レートの変動のリスクを負わせているわけですから、そういうリスクを、よりリスクを負担できる先進国に移転する方法を考えなければいけないと思います。どのようにすればよいかお話ししましょう。

グローバルな金融システムにおいて最も改革しなければならないのが、国際準備金制度です。現在、途上国は何兆というドルを準備金として持っています。これが何を意味するかといいますと、途上国はアメリカに対して非常に低い金利でお金を貸していることになるということです。以前、途上国がアメリカに 1% の金利でお金を貸し、20% の金利を払って借りているという時期があって、これは本当にひどい取引でした。今は少なくとも 5% になってきていますが、私たちの計算によると、アメリカの途上国への援助より、貧困国からアメリカに行く援助の方が全体では大きくなるという結果になっています。途上国が準備金を持っていることは、途上国から低金利で非常に大きい裏の海外援助を受けていることとなります。しかし、チェンマイ・イニシアティブの正しい方向への動きは始まっています、私はこれを拡大する方法や、さらにより安定したグローバルな金融システムを実

際に構築することができる方法を、本に書きました。

また、グローバルな法制度の改革も必要です。例えば、環境を破壊するものの責任を問うことや、あるいは国際的に競争がない分野について競争を推進することです。グローバルな独占体制は危険ですが、グローバル化した世界において、グローバルな独占体制を1つずつ片づけようと思ってもそれは不可能です。国際的な競争を促進する機関が必要です。

アフリカに関連する問題の1つとして、アフリカの国々がいわゆる「資源の呪い」という問題を抱えていることがあります。資源の多くある国は、平均的に見て、資源のない国よりも成長率が低いという問題です。その理由は何なのか、その対策は何かということに対する研究がいろいろ行われています。重要な側面は、ここにも書いてありますように3つあります。1つは透明性を高めるということであり、政府がどういう物を手にしているかわかるという資源採掘産業透明性拡大イニシアティブを拡大することです。透明性の高い税金の支払いのみ控除することは、非常に早く効果を生みます。2、3年前、賄賂は税金控除でした。言い換えれば、多くの先進国政府は賄賂のコストを50%支払っていました。それは汚職に対する補助金のようなものです。私は、OECDの閣僚会議で、アメリカの代表として、賄賂反対アジェンダを推進しましたが、それはビジネスのやり方を変えるということで、非常に抵抗がありました。透明性の欠如はビジネスのやり方なのでしようけれども、これは途上国にとってはひどい話です。

OECDはイニシアティブの1つとして、銀行の秘密主義を止めさせることを訴えています。多くの汚職の金がアフリカから外に出て、このような秘密口座へ行って、そこで保護されます。OECDは銀行の秘密主義を縮小することに合意しましたが、2001年8月にブッシュ政権が、このイニシアティブに対して拒否権を発動しました。2001年9月、皆さん何が起こったかはご存じだと思いますが、このような銀行の秘密口座がテロリストの資金管理に使われていることがわかりました。それ以来、一方でテロリズムに対しては、銀行の秘密口座は閉鎖させてきました。しかし、他方で汚職という分野になると、ブッシュ政権が2001年8月に拒否権を発動してから、世界の汚職があるすべての場所では、シャンパンで祝われています。6カ月後に本が出版されますが、ブッシュ政権の拒否権発動以来、このような秘密口座の資金が世界中のいろいろな犯罪に使われ、汚職が広がっていることが書かれています。

私たちは、途上国が資源の公正な配分を得られるようなモデルになる契約も開発する必要があります。

それから地球温暖化について、ここでは京都以降どうするかということについて幅広いアジェンダを書きました。反響が出始めているので、ここで1つ申し上げると、良いこと

より悪いことに課税する方が効果があるということです。働いて貯蓄したお金よりも、公害に対して課税をするということです。これは、私が推進している考え方で、2週間前にゴードン・ブラウン首相やサルコジ大統領がこの基本的な考え方に賛成してくれています。

最後に、より多くそしてより効果的な途上国援助が必要です。先進国は、GDPの0.7%を支援にあてると宣言しています。これはかなり前の宣言でありますけれども、この宣言はモントレーで延長されました。ただ、北欧の数カ国を除いて、ほとんどの国々はこれをまだ達成できていない状況です。貧困は今日世界が直面している最も重要な問題です。援助は過去、貧困削減に重要な役割を果たしてまいりました。今後さらに役割は大きくなると思います。特にプログラムが、例えば東アジアの成功した経験のような過去の成功に基づいている場合には、さらに重要になるでしょう。

私たちは今、援助を効果的にする方法について、よりわかっています。日本は、世界で第2位の経済大国で、途上国を含めてグローバリゼーションを機能させるために特別な責任を持っています。私は、これは非常にまれな機会だと申し上げたいと思います。日本は開発のことをよくわかっています。なぜなら、日本そのものがつい近年この開発のプロセスを経てきたからです。日本は、グローバルで、平和的な協力の必要性をよく理解しています。世界は、軍事力が何ももたらさらないということを学びました。やはりソフトパワーの働き、市民社会が重要だということです。途上国の貧困は、世界が直面する大きな問題の1つです。日本は、昔から途上国の成長の促進と、貧困との闘いに関わってきました。緒方理事長がおっしゃいましたように、JICAが新しい体制になるということで、より効果的に取り組める体制が構築されることと私は思います。

ありがとうございました。

## パネルディスカッションおよびフロアとの主な意見交換

小島明（日本経済研究センター会長）：スティグリッツ教授、どうもありがとうございます。グローバル化のいろいろな問題点をたくさん指摘していただきました。それから解決策、解決すべき分野という点も指摘していただきました。

これからの進め方ですが、白石隆先生はアジア経済研究所の所長であり、かつ政策研究大学院大学の副学長でいらっしゃいます。白石先生と、富士ゼロックス最高顧問の小林陽太郎さんに、今のスティグリッツさんのお話に対するコメント、質問も含めて、あるいは反論も含めていただきたいと思います。それを基にパネルで少し議論します。6時までの会合ですので、なるべく最後に時間を残して、お集まりの皆様との対話もしてみたいと思います。それでは、早速白石先生からお願いいたします。

白石隆（アジア経済研究所所長）：どうもありがとうございます。これだけのものを40分から45分で本当に話をされるのかと思っていたら、本当に話をされたのでかなりびっくりしています。

今、スティグリッツ先生の話聞きながらつくづく思ったのは、先生のようなエコノミストと、私のような政治学を勉強している人間では言語も違うのだなということです。非常に面白いのは、スティグリッツ先生の話の中で国家（state）という言葉が1回だけしか使われず、地域（region）という言葉は1度も使われていないことです。私は、この2点についてコメントと質問をしたいと思います。

最初は、国家の問題です。1990年代に冷戦が終わり、発展途上国の問題が議論されるときに、2つの意味での自由化（liberalization）というのが非常に強調されるようになりました。1つは経済の自由化であり、もう1つは政治の自由化（民主化）です。しかし、1990年代を通じての1つの教訓として引き出されたことは、この2つの自由化だけでは発展途上国が、政治的に安定し、経済的に発展するということにはどうもならない。やはり国家の制度（state institutions）というものをつくっていくことが大事なのだということだったように思います。

それは、スティグリッツ先生が世界銀行におられた1997年の“World Development Report”がState Buildingを特集していることから非常にはっきりしています。State Buildingということが非常に重要だということが、ちょうど10年前ぐらいに指摘されています。

ところが、それ以来現在まで、State Buildingということでは何が本当に重要なのかは

つきりしていません。State Building といってもいろいろなことがあるわけです。中央銀行をつくることも State Building の一部であれば、初等教育の制度をつくることも State Building ですし、軍隊をつくることも State Building であれば、警察を整備することも State Building です。極めて複雑な問題が State Building という言葉で捉まえられているわけです。

その中で、こういう発展途上国の発展にとっては何がいちばん重要な State Building なのだろうかということ、ステイグリッツ先生に是非お聞きしたいというのが私の1つのポイントであります。

私としては、State Building でいちばん重要なことは、生命と財産の安全性ということについての予測可能性を高めるということではないかと思っております。しかし、State Building で何が重要なのかということについては、この10年間にまだに合意はないと思います。それについて是非ご意見を伺いたいということが1つです。

もう1つは Region (地域) の話です。ご承知のように我々、アジア、アフリカ、ラテンアメリカということで、その地域について語りますが、その場合の地域というのは、単に地理的にそういう地域について話しているだけではなくて、そこには違う政治・経済のストラクチャーがあるということを、ほとんど無意識のうちに前提にして考えているわけです。

なぜ私がそういうことを申し上げるかといいますと、東アジアというのは随分面白い地域ではないかと思っております。それはどういうことかと申しますと、東アジアの地域には日本、韓国、台湾、シンガポールのように、経済的に発展した国もあれば、カンボジアのようについ10年前までは破綻国家と言われていたような所が、次第に治安が回復し、最近では外国からの直接投資も入ってくるようになり、経済発展が始まっているような所もあります。発展途上国もあります。

そういう所で、事実上の経済統合が直接投資によって進展し、それを踏まえて経済連携、FTAのような形で、事実上の経済統合を制度的にも支えていく努力が現在行われております。ともすれば、東アジアの FTA を研究しているエコノミストは、スパゲッティ・ボール効果だとか、ヌードル効果だと言います。

しかし、私は、既に経済的に発展した国と、途上国が事実上の経済統合を支援するような形で制度を整備し、そういう中で貿易の自由化と経済協力、あるいは経済支援をやっていくというのは、東アジアで初めて起こっているのではないかと思います。そういう中で、先ほど挙げたカンボジアのような国も10年前には破綻していたのが徐々に経済の発展が起こっているのではないかと思います。そうすると、こういう発展の問題をグローバ

ルに考えるだけでなく、Region のレベルでも考える意味はあるのではないだろうかと考えています。それについてもスティグリッツ先生のお考えを伺えればと思います。

**小島**：フットノートですが、世界銀行が“East Asian Miracle”の報告書を出したのが 1993 年です。つい 2 カ月ほど前に世界銀行が出した新しい報告書のタイトルが“East Asian Renaissance”です。アジア危機のときに IMF、ワシントン・コンセンサス的な見方によると、おそらく東アジアの国々はクローニー・キャピタリズム（縁故資本主義）であって、出来の悪い生徒であったはずですが、ルネッサンスをも迎えている。地域的な問題というのは非常に重要ではないかという感じがします。

スティグリッツさんにコメントをいただく前に、小林さんからの指摘もいただきたいと思います。グローバリゼーション、実際にはマーケット主導ということで、その中の主役である企業、ビジネス・グローバリゼーションがいちばん重要なファクターでもあると思いますし、ビジネスのリーダーとしての視点も加えて小林さんにコメント及び問題提起をしていただきたいと思います。

**小林陽太郎（富士ゼロックス（株）相談役最高顧問）**：ありがとうございます。今日はこういう機会を与えていただいて、大変感謝をしております。緒方理事長に今年の後半に、私が関係している所でスピーチをお願いしたものですから、理事長からの本日のパネリストのお話があって何となく参加しますとお話をしました。私はちょっと門外漢なので、心配しておりますが、ベストを尽くしてスティグリッツ先生がお話しになった非常に刺激的な内容についての感想を、3つか4つに分けて述べたいと思います。

今、小島さんからお話をいただきましたが、特にスティグリッツさんが最後に、日本が何をできるか、企業がこういった問題についてどんなことを考えられるかということをお話しになりました。その辺について感想をお話ししたいと思います。

まず第 1 は、グローバリゼーションの中身が変わってきているということです。1820 年に中国とインドを合わせて世界の GNP の 45%を占めていたのが、グローバリゼーションの主役は今ほとんどアメリカ主導と言われており、当たり前のことですが、グローバリゼーションの主役が変わってきていることを、我々は忘れがちではないかということが 1 つあります。

つい先日、神戸で孫文の記念の集まりがあって、私もそんなに勉強をしたことがありませんでしたが、参加しました。1924 年に孫文が神戸に招待されて、講演をいくつかした時に似たようなことを言っています。今（1924 年）は、まさに欧米が圧倒的に強い時代



だ。しかし、数百年前までは中国を中心としたアジアが圧倒的に世界の中心だったのだと言っています。スティグリッツ教授は現在でも極めて先進国に有利な二国間協定がたくさんあるという話をされていますが、当時もちょうど日露戦争が終わって、そういう不平等条約を日本がどんどん直していってくれており、そのことは、アジアの独立に大きな役割を果たしているということを孫文が当時言っています。

しかし、最近、ますますグローバリゼーションの問題がひどくなってきているのではないかという点は、非常にはっきりスティグリッツ教授がお話しておられます。ある意味ではアメリカ人であるスティグリッツさん、世界銀行のチーフ・エコノミストであられたスティグリッツさん、まさに今のシステムの中心におられる方が、かなり強烈な、ある意味での自己批判として、はっきり言われていることに非常に感銘を受けました。「それほど悪くないんじゃないの」と逆に言いたくなることもあるのですが、かなり問題があるということは事実だと思います。

一部の先進国主導で、先進国の利益がますます追求され、開発ラウンドなどというのは名前だけで、全然中身がないではないか。しかも先進国と言っても、それは一部の利害関係者の利益が追求されている。極端な表現を使えば、一種のアメリカン・クローニーズが1つのキャンプに入って、そうではないの人たちは割を食っているというのが現実ではないかという指摘だったと思います。少し表現は割り引くとしても、これは1つの事実として我々は認めなければいけないのではないかという気がします。

一方で、こういった先進国対途上国の話を考えながら、日本で、例えばグローバリゼーションを改革という言葉に置き換えてみますと、現在日本で進められている改革によって、いろいろ議論のあるところですが、かなり格差が広がっている。特に地方の問題は、非常に大きくなって、極端な言い方をすれば、それが今度の参院選の結果だと言われている。改革が日本国内の地域格差を広げたという問題と、グローバリゼーションが先進国と途上国のギャップを非常に大きくしたという問題は、結構似ているところがあると思います。

もう1つ重要なことは、グローバリゼーションが、途上国の中に二極化をつくっているのではないかという点です。48の最も発展の遅れている所は、ますますひどくなったというお話がありましたが、中国、インドなどは逆に、日本も含めた先進国の一部に対して、将来にある種の脅威を与えるような存在にまでなってきている。こういった問題をどのように考えていったらいいのか。もちろん、これは先進国側の次の問題としては、より成熟した民主主義が鍵だと言っておられて、確かにそれは理想だと思います。しかし、現実にはこのグローバリゼーションをどうやってより良く機能させるかということも、当分は力の引っ張り合いというか、かなり厳しい面は現実にはあるのだらうと思います。方法と

しては、今途上国と言われている、しかもその先頭に立っているような中国やインドは、ますますプレゼンスを増すことは間違いないということを前提にすれば、今のうちに先進国として、そういう国々や、しかもさらにアフリカなどを含めて、一生懸命付いていこうと努力をしている国々に対して、何ができるかということについて、さらに工夫をする必要があるのではないかと。これは私も100%賛成します。

特に日本の場合には、先進国の一部として、現実の問題としては、下手をすると中国を含めて、そういった強い途上国の競争の下で潰されるかもしれない、という心配が経済的にはないわけではありませんし、経済界でもそういう心配を持っている人はいます。現実的に短期的にどう対応するかは、もちろん個々の問題として議論するとして、長期的な視点としては、今のようなことをきちんと胸に据えておくことが必要ではないかと思います。

4番目は、それに絡んで日本と企業の役割で、日本はつい最近まで先進国の仲間入りをしようという途上国だったのではないかというのは、まさにおっしゃるとおりです。正直、本当に日本人というのはそのころのことをちゃんと記憶しているかどうか。例えば、中国と話をしたり、アジアの国々と話をしたりするとき、だいぶ前から日本は先進国みたいな感じで話をしている場合が多くて、ついこの間まで現在の中国やアジアの国々と似たような状態を経済でも政治でも、たくさん持っていたことについては、ほとんど忘れてしまったか、あるいは考えたくないか、そういう場合が非常に多い。それに対して、スティグリッツさんが、まさにそういう経験を活かして、日本が重要な役割を果たせるのではないかというのは、大変重要なメッセージだと伺いました。

企業の方がおられると、「馬鹿なことを言うな」と叱られそうですが、企業の世界でも特許、知的所有権の問題に絡んで、ライセンスをするのにオープン・ポリシーでいくか、クローズド・ポリシーでいくか。極論を言えば、ライセンスフリー・ゼロでいこうという議論があります。ライセンスフリーを取りません、というのは、別に福祉のため博愛のためにやるのではなくて、そのほうがマーケットが広がるのではないかと、独占を維持して、その中でたくさんの利益を取るよりは、マーケットを広げることによる利益が大きいのではないかと考えるわけです。これは先進国対途上国、国と国でもそうですし、まさにラウンドの問題などを議論するときも、サービスの問題あるいは技術の問題、知識の問題をおっしゃいましたが、基本的にはそういう考え方が非常に重要になってくると思います。

ただ、一方では受け皿の途上国で、きちんとしたガバナンスをつくっておいてもらわないと、せっかく広がるつもりで技術の移転をしたら、そこからの上がりだが、それぞれの国の本当に一部の金持ちの所にしか行かないのでは何もならないわけで、そういう面は考えなければいけません。

最後に日本としてできることはないかということについては、20～30年前まで日本がどういう状況であったのかも、我々は謙虚に思い起こしながら、この問題について考える必要があるのではないかということを感じた次第です。感想だけ申し上げました。

**小島：**どうもありがとうございます。これもフットノートですが、最後に小林さんがおっしゃられた、日本がどういう状況であったかというのは、20～30年よりもっと前ではないかと思います。来年、北京でオリンピックがありますが、アジアにおける最初のオリンピックは日本で1964年に開かれました。あのとき新幹線をつくったのですが、世界銀行から資金を得なければ新幹線はできなかったという時代でした。お二人のコメントに対して、スティグリッツ先生にコメントをお願いいたします。

**スティグリッツ：**コメントありがとうございました。それでは、いくつか私からコメントをさせていただき、それからまた会場の皆さんとディスカッションをしたいと思います。国家の強化ということで今おっしゃられた点には同感です。問題は、国家がどのような役割を果たすべきかということです。開発のプロセスにおいては、少なくとも2つの大きな役割について注目すべきだと思います。1つはいわゆる **Developmental State**（開発主義国家）です。開発の触媒を果たす国家の役割は、世界銀行、IMF、ワシントン・コンセンサスの人々が、あまり強調していない役割ですが、実際は東アジアの成功の鍵になりました。東アジアの国々は、国家を開発において、非常に積極的に使ってきました。

1つ興味深いのは、実際のところ、アメリカ政府もその開発の初期の段階において **Developmental State** だったことです。19世紀のアメリカの主要な産業は農業でした。アメリカ政府は、**land grant college**（国有地を付与された州立大学）を創り、研究を行う、あるいは農業、鉱業、応用化学を教えるだけではなく、その延長として知識を個々の農家に提供しました。これは、政府は高度な技術を個々の農家に提供するものであるという考え方を基盤にしています。このことからアメリカが消極的な国家とはかなり異なる考え方を持っており、積極的な国家であったということがわかります。

アメリカ政府は、電信回線をボルチモアとワシントンの間で、世界で初めて敷設しました。それは、19世紀の電信革命の始まり、そして20世紀になってのインターネットの構築に役立てられました。両方のケースとも最終的に民間に渡されましたが、国家が触媒の役割を果たした例であるといえます。政府は不動産市場をつくり、中小企業に融資をすることによって触媒的な役割を果たしました。フェデラル・エクスプレスやすべての民間宅配企業も中小企業局の融資で仕事を始めました。特に途上国において、企業家精神を持つ

た人たちがまだ成長していないようなときには、開発を推進する役割が国にはあると思います。

もう1つの国家の役割としては、保護があります。国連の委員会で、緒方理事長がセン教授とともに人間の安全保障ということで強調されているテーマの1つです。国家は、特に市場がまだできていない段階において、重要な役割を果たします。先進国においては、保険を買うことができます。しかし、アメリカにおいてさえも5,000万人の人たちは健康保険を持っていません。彼らには病気に対する保護がありません。また、失業保険も同じです。民間セクターでは失業保険はカバーされていません。退職時の年金も同様です。政府の社会保障制度の取引コストは、民間セクターの一部にすぎません。民間セクターは、まだ退職後のインフレから保護してくれる保険を出していません。民間市場では、保証することができない様々なリスクがあり、それに対して国家は重要な役割を果たすことができます。この役割は、途上国あるいは先進国で異なり、また、時代によって、あるいは国によっても大きく異なります。だからこそ、1997年の世界開発報告書で我々が強調したのは、国家の強化ということだったのです。

これは小林さんがおっしゃったことと非常に関連していると思います。開発というのは複雑であって、すべてのプレイヤーが必要である。すべての企業、民間セクター、市民社会が必要です。どこかを阻害してやるわけにはいきません。

インドで何が起こったか、インドはどのようにして成長したかを述べたいと思います。インド政府は1980年代初頭まで、企業に対立するような姿勢を持っていました。1980年代に政府は姿勢を変え、企業を支援するようになりました。それは、企業との対立から企業への支援に単に変わったことなのですが、それ以上にインドは変わりました。それまで2、3%程度の成長率だったものが5、6%の成長率になりました。強い国家と同様に、強い民間セクターの両方が重要だと認識する必要があると思います。

国家の強化については、当然ながら簡単な方程式があって、国家を強化できるわけではありません。ただ、私の懸念の1つは、グローバリゼーションによる国家の弱体化が、様々な形で現れていることです。グローバリゼーションは国家ができることを制約し、国家への要求を強めることで国家の対応能力を低下させています。1970年代、80年代の世界銀行やIMFによる、最低限の国家に焦点をあてた構造調整戦略の問題の1つは、国家を弱体化させてしまったことです。先ほど破綻した国家としてカンボジアの例が出ましたが、国家が弱体化すれば社会が成長しないということがわかります。過去のいくつかの戦略は国家の弱体化を招いてしまいました。そのため、国家を強化するための支援が必要になると思います。

私がホワイトハウスにいた時に、「政府改革」と呼ばれる面白いイニシアティブに関わりました。何をやったかという、各政府省庁に対し、「政府は何のためにあるのですか。政府はどういうことをすべきでしたか。もっと効率的にできませんか。最も良い方法でやりましたか。他のやり方はありませんでしたか。」という質問をしました。最初から「政府を簡素化できないか」とは聞きませんでした。問題は、行政に必要なある機能があるかであり、それをより効率的にどうすればいいのかということです。これは国家の構築と強化の一部です。私の言ったことは、国家を強化するあるいはより効率的な国家をつくるための支援のプロセスの一例です。

地域協力、地域開発についてコメントいたします。私は成功が拡大するのは明らかだと考えています。日本の成功は、近隣諸国である韓国、台湾、香港にも非常に大きな影響を与えました。そして、これらの国の成功が、今度はタイ、マレーシア、インドネシアに影響を与えました。この地域で起こったことは、プラスの広がり一例だと思います。お互いに学び合い、お互いに、今向こうは何をやって、我々は何をやっていないのか、何ができるのかということ問いかけ、そしてそれが広がるわけです。

経済界も重要な役割を果たしました。開発支援もそうです。日本の成功から東アジアの成功への動きの歴史を見ると、日本の企業が協力をして開発支援を行っています。インフラの整備に関して、どのようなインフラがビジネスの成功のために必要であるのか、どのような政策支援が企業の成功のためには必要であるのかを話し合い、日本の企業と日本政府が協力し合ったのです。日本を成功に導いた同じような協力が、東アジアの他の国々の成功の基盤になっています。このような協力が、もう一度必要ではないかと思えます。

"East Asian Renaissance"の話ですが、本当に驚くべきことは、1997年の経済の下降局面が短かったという点です。それは、歴史的には一時的でした。危機の時にはそのようには思いませんでした。それは本当にエキサイティングでした。というもわからないからです。下降しているのはわかります。ただ、いつストップして、どのくらいで回復するかということはわかりませんでした。しかし、実際は、ほとんどの国はV字型に非常に早く回復したわけです。開発モデルに基本的な問題がなかった証拠です。事実、私は、この問題は準備ができていない国に資本市場の自由化を過度にやりすぎたことが原因であると診断しています。不動産バブル、株式市場バブルのようなある種の市場の失敗にさらされ、経済はそれに対する対応体制がとれていなかったということです。国家は自由化に対応できる規制能力も、マクロ経済的な能力もなかったのです。ある意味では、Renaissanceという言葉は間違いではないかと思えます。これは継続的な成長に1997年に一時的な落ち込みがあったとみなすべきです。ですから、ファンダメンタルに誤りがあったというIMF

の提案は、誤診であったと思います。

以上にしましょう。質問を受けたいと思います。他の問題については、また後ほどお話ししたいと思います。

**小島**：お二人ともお答えにご満足ですか。

**白石**：もう少し質問させていただきます。それは、**Developmental State** の問題です。確かにチャルマーズ・ジョンソンが最初に日本の戦後の発展を説明するときに、**Developmental State** という概念を使って、それ以来、特に韓国、台湾の経済発展を説明するときにも **Developmental State** という概念が強調されている。私もチャルマーズ・ジョンソンが使ったような意味よりも少しルースに **Developmental State** という言葉を使っていますが、こういう国家の役割というのは、規制国家とは違う国家のタイプとしてあった、あるいはあるということは同じ意見を持っています。

問題は、グローバル化が進展するに従って、こういう **Developmental State** のようなものに何ができるのかということです。つまり、国家が門番として国内市場を保護できない、そういうグローバル化が進んでいる中で、**Developmental State** というのは、果たして何かやる役割がまだあるのだろうかということ、もう少し伺いたいと思います。

**スティグリッツ**：非常に重要なご指摘であり、多くの途上国が強く感じていることだと思います。現在の管理されているグローバリゼーションというのは、政策の余地を少なくしてしまっています。そして、私たち途上国に対してアドバイスする者にとっての課題は、現在 **WTO** による規則があるわけですが、どうやって途上国がこういう制約の下に、**Developmental State** の役割を果たせるかということです。私は、まだその余地はあるが、それはより難しくなっているという意見を持っています。日本は **WTO** 以前であったので、今日の国よりやりやすかったということはあるでしょう。

わかりやすくするため、例を挙げてみましょう。ブラジルはエンブラエル社を地域の飛行機メーカーとして大きく成長させることに成功しました。さらに、ブラジルはバイオ燃料を開発しました。国内のすべての自動車がバイオ燃料で走っており、バイオ燃料により、エネルギー的に独立した国になりました。アメリカよりもはるかに進んでいます。比較のために申し上げますと、アメリカのトウモロコシを原料としたエタノールに、ブラジルの砂糖を原料にしたエタノールとの競争力を持たせるためには、アメリカはトウモロコシ原料のエタノールに 50 セントの補助金を出し、砂糖を原料としたものに 50 セントの税金を

かけなければならないのです。ブラジルが砂糖を原料としたエタノールを開発するのに成功したことによって、アメリカでは1ガロン当たり1ドル必要になるわけです。これは非常に重要な事例であり、地球温暖化の観点からも、なおさら重要になります。これらは非常に大きな作用を生んだ例で、Developmental Stateの余地があるという例だと思います。ただ、かなり手が縛られてきていることは確かで、その余地は少なくはなっています。

**小島：**お約束したとおり、フロアの皆さんからご質問を頂戴したいと思います。

**フロアの参加者 1：**まず開発援助とグローバル化との関係を、もう少し明確にご説明をお願いしたいと思います。

それから、アメリカの中で、政府は当然だと思いますが、グローバル化ということで国民の中には、それに必ずしも賛同しない方もいらっしゃると思います。やはりグローバル化が主流と考えてよろしいのでしょうか。

**スティグリッツ：**グローバル化のテーマは、アメリカだけではなくヨーロッパでも、また多くの先進国で途上国と同様に議論を呼んでおります。グローバル化は皆を豊かにするはずで、皆が豊かになれば、皆がグローバル化を支持するはずで、それにもかかわらず、皮肉なことに、皆はまとまってグローバル化に反対しています。いったい問題は何なのでしょう。私が今まで指摘してきたのは、たとえば、グローバル化によって成長が加速されても、不平等が拡大しているということです。グローバル化の利益が平等にシェアされていないわけです。特にアメリカでは不平等の拡大が深刻になっているため、大きな問題になっています。グローバル化は、不平等を拡大する要因の1つですが、これについて皆何かできるのではないかと感じています。他の要因として、テクノロジーの変化、組合の弱体化などがありますが、皆はテクノロジーについては何もできないと考えています。

アメリカで起こっていることの規模については、今わかりつつあります。数週間前に1つ研究が行われました。そこで指摘されているのは、今のアメリカにおける30代の間層の労働者は、30年前の労働者よりも貧しくなったということです。現在私たちは中間層が低下していく世代にあり、ここ6年間でさらに悪化してきました。アメリカは毎年2から5%程度成長していますが、今のほとんどのアメリカ人は、6年前よりも豊かではなくなっています。すべての成長は、少数のトップの人たちに行ったにすぎません。それが現在の経済的、政治的、社会的な大きな問題になっています。

現在、少なくとも民主党の大統領候補者たちは、どのようにグローバリゼーションに対応すべきかを考えています。私のスローガンは、平均的なアメリカ人を、保護主義に頼ることなくどのように守るかということです。オープンなそして自由主義的な経済を維持しながら、平均的なアメリカ人を保護することができるのか。私はできると思いますが、そのためにはより累進的な所得税や、セーフティー・ネットの改善、教育の向上、研修プログラム、職業再訓練などが必要になります。そうすると、国家の役割の議論に戻るわけで、もっと積極的な国家が必要になってきます。

面白いのは、例えば世界の国を見てみますと、平均的な人が豊かになり、ある意味でグローバリゼーションに成功している国は、北欧諸国です。北欧諸国は、税率が高い国々です。よく言われるグローバリゼーションの神話の1つとして、グローバリゼーションに成功するためには、税率を低くしなければならないというのがありますが、それは完全に間違っています。グローバリゼーションは、社会に対するストレスが多いため、強力な国家を必要とします。強力な国家は、より効率的、効果的でなければなりません、そのためのリソースも必要です。それは、好む好まざるに関わらず、税金ということです。ここで強調されるのは、こういうグローバル・レベルで起こっている力です。

公共財としての知識の性質と、開発における知識の重要性についてお話ししましょう。これもまた非常に典型的に、政府が必要とされる分野です。経済学者の中で、知識は公共財であるという言葉があるのですが、それは、別の人が知識を使う限界コストはゼロであるということの意味をしています。私がある知識を知っている、それを皆さんに伝える。そうすると、皆さんもそれを知ることになり、私もまだ知っているわけです。これは例えば椅子のような私有財とは異なります。もし、私が椅子に座っていると、皆さんはその椅子を使えないか、座っても快適に座ることはできません。私が何か食べると、皆さんはそれを食べられません。しかし、知識は違います。知識が公共財であるという考え方は、アメリカ建国初期の大統領であるトーマス・ジェファーソンが論じており、彼は、知識はロウソクのようなものであると言っています。ろうそくの光は他のものを照らしますが、別のろうそくの光を奪っていないというわけです。彼は、政府が **Developmental State** の役割をすることや、教育を推進することを強く支持していました。アメリカの初期の大学であるバージニア大学を創設したのは彼でした。知識は、公共的、集団的な性格を有しているため、初期の段階において、国家が教育を推進することは重要であるということがわかります。

ワシントン・コンセンサスが誤っていたのは、国家のバランスの取れた役割よりもむしろ、国家の最低限の役割について議論していたことです。国家が何を必要としているか、



民間セクターは何を必要としているか、どこでパートナーシップを組むべきか、どこをお互いに補完すべきか、どのように補完して行動すべきか。これは各社会が直面している基本的な問題です。しかし、残念ながら、サッチャー、レーガン、ブッシュは、皆あまりに議論を単純化しすぎたと思います。実はもっと複雑な問題なのです。単純化することによって、問題の肝心な点があと戻りしてしまいました。

**小林：**今、スティグリッツ教授がおっしゃったことと、先ほど白石さんが言われた **Developmental State** というのは、開発型経済という意味だと思うのですが、それに絡んで再検討するべきではないかと思うことがあります。かつて日本の産業政策がかなりたたかれた時があります。日本には、いわゆる政官財の鉄の三角形があることに対して、私もちょうど日米財界人会議などで産業政策論がいろいろ議論になっているとき、アメリカの中でもそれを非難する人と、アメリカだって国防総省に絡んですごい産業政策があるではないか、農業政策だってあるではないかという人がいました。今の教育の問題に絡んで、日本の場合には戦前からかなり高い均一な教育水準があって、そこから生まれてくる政治家、行政、経済のレベルが揃っていたから、ある1つのシステムができたということがあるのですが、少なくとも透明度さえ確保されていれば産業政策は十分に機能したのではないかと思います。残念ながら、かなり内向きになっていて、外に対して透明度がかなり限られていたので、非常に問題があったと思いますが、これからの途上国などである種の産業政策の変形というか、そういうものは案外考慮の対象になるのではないかと思います。特に政府の役割とか、それぞれの役割を考慮するという意味でそんな感じがします。

**スティグリッツ：**そうですね、私も同感です。ここ数年私が関与してきたことの1つに、アフリカ諸国に関する議論があります。私は政策対話イニシアティブ (IPD) という小さな NGO を組織していて、そこにアフリカ・タスクフォースがあります。アフリカ・タスクフォースの主な考え方の1つは、産業政策の概念をアフリカに適用できないかということです。エチオピアのメレス首相や、南アフリカなど、多くの国々がこの概念を議論しており、議論しているだけでなく、実際に実施し、成功しています。問題は、現在は過去とは異なる様々なルールが存在し、世界も変わってしまったことです。過去にやったことと同じ方法ではやれません。ただ、基本的な考え方は、非常に重要な考え方だと思います。

アメリカは産業政策を持っています。それは非効率な産業政策です。なぜならすべて国防総省の中に組み込まれているからです。私たちは多くのイノベーションを推進していますが、100ドル使って、1ドルのイノベーションをやっています。しかし、国防総省は経

済にイノベーションをもたらす主要な源であって、成功した国のほとんどすべてが産業政策を持っていたことは認識すべきでしょう。問題は産業政策を持つべきかではなく、最も効果を上げるためにどうすべきかということです。

**小島：**それでは、最後の質問です。

**フロアの参加者 2：**私は日本の金融機関で働いております。国家の役割における今までの議論に関連して、教授は多くの論文や本において情報の非対称性について書かれていらっしゃると思いますので、途上国の金融システムや金融インフラの役割についてご意見をいただければと思います。いわゆる途上国のマイクロファイナンスを含めた、効率的で、透明性の高い金融市場の役割をどのように評価されていますでしょうか。

**スティグリッツ：**私は良い金融市場は開発の成功に必要な不可欠なものだと思います。信用へのアクセスは、少なくとも開発をより容易にします。市場はそれ自体、自然に成長を遂げるものではありません。日本の場合は、初期の段階において、政府は投資銀行をつくるための長期資本を提供するなど非常に重要な役割を果たしてきました。これは他の国でもそうです。伝統的な銀行は、短期の運転資金が重要であるとして、そればかりに重点を置きました。しかし、長期投資の金融としては不十分なのです。したがって、金融市場の成長を助けるために、政府が重要な触媒的な役割を果たさなければいけないのです。金融市場が発達し、銀行が存在するときでさえ、最近では現実に問題があります。これは WTO に関連しています。外資系の銀行が進出し、国内の銀行を買収した場合、中小企業に貸し出すよりむしろ、多国籍企業や国内の大企業あるいは政府に対して貸し出すことばかりを考えます。私たちが最近コロンビア大学で行った調査では、外資系の銀行に対して門戸を開放すると、中小企業に対する資金提供が減り、成長も低下するという結果が示されています。金融市場の自由化は、成長の拡大につながるという人がいますが、IMF の最近の調査でも私どもの調査でも、その証明はできていません。情報の非対称性の理論がまさに予測したことです。つまり、外国人は、国内市場について知識が不足しています。特に中小企業については知識が不足しているので、情報の取りやすい、外国に担保を持っているような多国籍企業などに貸出しがちです。私たちは政策対話イニシアティブ (IPD) にこの問題を検討するタスクフォースを持っており、途上国がいかにして資本へのより広いアクセスを確保するかということの研究をしています。

東アジアの金融危機で不幸だったのは、皆が強い健全な銀行ばかりをフォーカスしたこ

とです。強い健全な銀行をつくるということは、やりやすいことなのです。アメリカや日本の国債に投資をしていれば、強い銀行はできます。ただ、その銀行は経済の助けにはならないのです。重要なのは、国債に投資するだけでなく、経済成長のために信用を供与する銀行の機能です。安定性と金融へのアクセスの問題をどうやって組み合わせるかということです。それがまさに現在検討している問題の1つです。

いくつかの途上国が施行している、もしくは施行しようとしている政策があります。例えば、インドでは、最近外資系の銀行が国内に支店を増設する場合には、デリーやムンバイだけでなく、インドの十分な金融機関がない場所にも支店を開設しなければならないという法律を制定しました。アメリカでは **Community Reinvestment Act (CRA: 地域社会再投資法)** という法律があって、銀行に対して、預金の一部を金融サービスの十分でない市場に再投資をすることを要求しています。私は政府にこれらに類似した法律を制定するように求めています。信用に対するアクセスをより増やすような戦略はあります。金融は重要ですが、金融はすべてに対して提供されなければなりません。

マイクロクレジットは非常に重要です。特にユヌス氏がノーベル賞を受賞してから、マイクロクレジットは非常に広がりました。それは貧しい人たちの生活水準を引き上げるためにも重要です。ただ、信用の額が少なすぎるため、持続的な成長の基盤には不十分です。人を雇っているような中小企業の規模ではありません。1人で自分の時間を使って養鶏をしている女性の収入が、200ドルから300ドルもしくは300ドルから400ドルに増加すれば、それはとても重要です。25%、30%所得が増えるわけですから、これはかなりの変化です。しかし、開発を達成するために必要な持続的な経済成長という観点から、これでは不十分です。懸念されるのは、ミクロなレベルでは信用が供与され、大企業も信用が供与されていますが、その間の中小企業はニーズがあるのに、お金が供与されていないということです。

**小島:** どうもありがとうございます。最後に私なりの感想をまとめて終わりとしたと思います。

今回のこの大きなテーマは、21世紀にずっと議論をし続けなければいけないグローバリゼーションの光と影の問題です。影の問題が最近ますます議論されていますが、光を止めれば、影も消えます。しかし、光を止める、つまりグローバリゼーションを全部否定することは、おそらく新しい発展そのものも否定することになるという感じがします。したがって、グローバリゼーションの光の部分を中心にしながら、影をいかにしてただ止めていくか、少なくするかということだと思います。

9・11 というと、2001 年のアメリカにおけるテロの日付ですが、これはグローバリゼーションの影の部分象徴しています。先ほど質問にあったアメリカではどうだという話ですが、1999 年 12 月に WTO のシアトルの総会・閣僚会議は、まさに象徴的で、アメリカの中に反グローバリズムが生まれたのです。以後、これが世界に一層広がって、反グローバリズムのデモが、主要な会議にはみんな付き物になっています。

しかし、9・11 を逆にした 11・9 は、1989 年 11 月 9 日、ベルリンの壁が崩壊した日付です。これでグローバリズムの新しいバージョンの時代が始まって、それは 21 世紀、当分の間、我々とともにあるのではないかと思います。

そのあと、投資の話もありましたが、経済の面で言いますと、グローバリゼーションのプロセスの中で最も重要なエンジンは、国境を越えた直接投資であると思います。冷戦の時代の直接投資、国境を越えた世界の直接投資の年々の累計が、ちょうど 1988 年の時点までの累計で、1 兆ドルを若干超えました。ところが冷戦が終わって、直接投資が爆発的に増えて、例えば西暦 2000 年の 1 年だけで、その前の何十年かの累計を超える 1 兆ドルの直接投資が行われたのです。これによって世界的な大分業、それを受け入れた国が発展しました。冒頭にスティグリッツさんがおっしゃられたインドと中国はそういう要素があったと思います。

しかし、影の部分のもう 1 つの重要な点は、スティグリッツさんの最初の報告で、政府と日本の役割との関連で指摘されましたが、パブリック・ポリシーの要素というのは、一層重要になっている感じがすることです。というのは、グローバリゼーションが進む過程で、市場主導の変化が起こったのです。直接投資を含めて民間の資本は利益がない所には行きませんし、リスクがあまり大きい所へも行きません。したがって、初めから市場のプロセスにおいては、一部の国が政治的にも混乱し、社会的にも混乱し、経済も混乱し、その悪循環に陥っているような国があります。そういう国はまさに経済を良くすることによって政治も社会も安定させるというプロセスを期待しているわけですが、その国がそういう状況だからこそ、市場主義の資本はそういう所に行きません。そういう 1 つの要素があると思います。

一方で、冷戦時代は東のキャンプも西のキャンプもそれぞれの同盟国を増やすためにいろいろ援助をしましたが、冷戦が終わった後、そういう同盟国を束ねるための援助はしなくていいという自由を西側も東側も得ました。それから長い間の ODA を中心とする援助に対する援助疲れという要素もありました。

冷戦が終わって、グローバルな資本、民間の資本は増えましたが、政府の資金、公的な資金の流れは、むしろ減ってしまったのが現実だと思います。しかし、その結果、市場か

ら取り残されている国々、地域に対する光が当たらなくなっている面があります。最近の G7 でも G8 でも、盛んにそれを議論し始めているということだと思います。その過程では、State として、あるいはグローバルに国が協力しながら、そういうところを手当てすることが一層必要な状況になってきているという感想を主にいただきました。

本日は、会場の皆様からも積極的なご参加をいただきました。たくさんの発言希望の手が挙がっていましたが、時間の関係で大変失礼いたします。

本日は、スティグリッツ先生、小林先生、白石先生、貴重なご意見をどうもありがとうございました。それでは、最後に、司会の加藤さんにバトンをお渡しします。

**加藤：**小島さん、どうもありがとうございました。同時通訳の皆様、お疲れさまでした。以上をもちまして、本日の講演会を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

---

スティグリッツ教授およびフロアの参加者 2(P31)の発言は英語で行われ、日本語版はその同時通訳を基に作成した。

英語版 講演録

Seminar Report: English Version

## Opening Address

**Chairman:** Thank you very much for joining us in this special seminar by Professor Joseph E. Stiglitz, organized by the Japan International Cooperation Agency and the Japan Center for Economic Research. First, on behalf of the organizers, Dr. Sadako Ogata, President of JICA, Japan International Cooperation Agency, will say a few words.

**Dr. Ogata:** First, I would like to express my appreciation to you for joining us in this seminar by Professor Joseph Stiglitz, organized by the Japan International Cooperation Agency and Japan Center for Economic Research.

Now, I would like to thank Professor Stiglitz for accepting this invitation, and also I would like to thank the panelists and the moderator, the three gentlemen, for accepting the invitation to come here.

First, I would like to briefly introduce Professor Stiglitz to you. He graduated from Amherst University, and at Massachusetts Institute of Technology, he acquired a Ph.D., and after that, he studied at Oxford University, Yale, and others. He taught at these institutions, and in 2001 he received the Nobel Economic prize for research about information asymmetry. And in the Clinton administration, he was a member of the CEA, the Council for Economic Advisors, and he also became a World Bank senior vice president and chief economist. At this moment, he is a professor at Columbia University, and also he is the chairman of Columbia University's Committee on Global Thought. His book, Making Globalization Work, I think, is a very famous one. And also, Globalization and Its Discontents should be a renowned book.

The reason why we invited Professor Stiglitz is that in October of next year, JICA will in fact integrate with the yen loan area of the Japan Bank for International Cooperation, and this new JICA is expected to be the largest bilateral aid organization. I hope that the integration of JBIC and JICA will not be just a simple sum, and I would like to make sure that we are going to bring about synergistic effects.

With respect to the research organization, it is expected that the research organization will be strengthened. The research institute of JICA and JBIC's Development Institute will be integrated to establish a new institute. The new

institute will embark upon research that is based on the ground, and this will become a think tank for development assistance.

The new JICA, I hope, will be able to make a great contribution towards development aid. At this moment, focusing on several themes with international researchers, we have been cooperating in moving ahead with research projects. We have been strengthening the functions of the research institutes. And as an attempt, as part of this, we have been holding this seminar in cooperation with the organization, and we have been trying to do our best.

2008 will be the year of the birth of a new JICA, and prior to that, there is going to be the fourth TICAD, the Tokyo International Conference for African Development that will be held in May next year. Also, there is going to be G-8 Summit that will be organized in Japan next year. So in this respect, 2008 will be a great occasion for us to exert Japan's leadership. For Japan, I believe this is going to be an enormous opportunity for us.

Globalization is the trend of the times at this moment, and we hope we'll be able to have a good discussion about globalization and the development of developing countries, and I hope to hear the views of the participants. I would like to thank you again for your participation today.

**Chairman:** Thank you. Now at this time, I would like to pass the baton to the moderator, Mr. Akira Kojima, who is the chairman of the Japan Center for Economic Research. Mr. Kojima, please.

**Mr. Kojima:** Now, I would like to ask Professor Stiglitz to give us the keynote speech. Dr. Ogata introduced him very much in detail. Since 1997, he has been at the World Bank. At the initial stage of the Asian financial crisis, he criticized that the IMF's way was incorrect. Professor Rogoff is back at Harvard University but at that time he was a chief economist, and Professor Stiglitz and Professor Rogoff had a big debate on a web site, and I enjoyed the debate tremendously. Who was the winner? I think it's obvious. And after that, in 2001 he won a Nobel prize in economics. So, for the global winner, I think it was obvious that Professor Stiglitz was the winner. So with respect to Asia, he has made the observation, and



also he gave policy advice. Given today's theme, he is the ideal speaker. So, he is going to speak for 40 minutes. Professor Stiglitz.

## Keynote Speech : Professor Joseph E. Stiglitz "Making Globalization Work for Developing Countries"

**Prof. Stiglitz:** It's a real pleasure to be here to talk on this subject of making globalization work for developing countries. In a way, the title summarizes a great deal of what I'm going to say. Making globalization work suggests that it's not working, and in fact, that's one of the themes -- that it's not working both for developed and developing countries -- but the title, making globalization work, also suggests a note of optimism, that there are reforms in the way globalization is managed that could make it work. So what I want to do this afternoon is to describe both some of the successes of globalization for developing countries, some of the failures, and some of the reforms in the way globalization is managed that could enhance the likelihood of success.

When one talks about the successes of globalization, one has to begin with the story of India and China, two countries with 2.4 billion people, which have been growing at historically unprecedented rates, continuing the successes of the East Asian miracle that Japan had led beginning in the early 1960s. The pace of this growth is really phenomenal. China has been growing at close to 10% for three decades. Little noticed is that India has been growing at five to six percent for a quarter century, and in the last few years, has been growing at actually 8% or more. And in fact, these countries have become the engines of global economic growth. The world economy has been growing at close to 5% for the last two or three years, a rate not seen for several decades or a quarter century. And it's not on the basis of growth in Japan, in the United States, or Europe. The basis of this has been growth in these emerging markets.

I just want to spend a moment putting all this in historical perspective because sometimes we forget how fast the world can change. In 1820, China had a third of global GDP, and India had more than 15%, and this is the picture of what global GDP looked like over the centuries. These numbers are not very, very reliable, but they are not too bad. And what they show is, as I see it, that China had close to a third of the global GDP, and India 15% in 1820, and what you see is the rapid decline in India and China beginning in 1820. And now, they're getting back, but only partially back. It wasn't an accident that they declined. It was actually a result of changes in

technology and economic policies. The industrial revolution occurred, and also there were deliberate attempts on the part of the U.K. government and other governments to kill India, to kill India's exports, and it worked. Indian textile exports to Britain fell by two-thirds in the span of a decade. India had been a major global producer of textiles. It became a major importer of textiles from the U.K. So this shows that policy can make a difference.

But it wasn't just soft-power policy, it was also military policy. The European powers attacked China because they wanted to make sure that China was open, open to opium, and China was exporting china, you know, ceramics, and other goods that Europe wanted, but Europe had nothing that China wanted. So Europe figured if they could get China addicted to opium, they would have something to sell. It's a sad moment in global history.

Globalization has played a major role in the successes of China and India, largely by both the export-led growth and access to technology. As I said, globalization, and here I'm just focusing on economic globalization, the closer integration of the countries of world as a result of lower communication and transportation costs, and the reduction of man-made barriers to movements of good, services, capital, people, ideas, and knowledge. And the pace of the lowering of telecommunication costs in the 90s is really phenomenal; there was a 50% annually compounded annual decline. These are some of the successes of globalization, and as I turn to talk about some of the problems, one shouldn't forget the importance of these successes.

But elsewhere, there is a great deal of discontent with globalization, both as a result of the outcomes of globalization and the processes, and I want to talk about both.

There is a marked contrast between the success in East Asia and the disappointments elsewhere. For instance, Latin America, which was the best student of the Washington Consensus --- the set of policies that the World Bank and the IMF pushed on the world --- in the 90s where this advice was most assiduously followed, their growth was half of what it was in earlier decades. Brazil grew at 5.7% for 75 years before 1980. Then they started listening to the World Bank and the IMF, and now they are happy if they grow at two or three percent. That's viewed as a success. They forgot the fact that for 75 years, they grew at close to 6%. The region as a whole

has been marked by growing poverty, unemployment, crime, a growing fraction of the population in the informal sector without job protections, and what growth has occurred has gone mainly to the upper income groups.

Looking at it over a 25-year period, Africa has had a decline in per capita income. The good news is, in the last two or three years, this has been arrested, and one shouldn't again forget that, and hopefully maybe we'll have time later to talk about what is the reason for this change, this growth in Africa in the last two or three years, and how can it be sustained.

An American, Tom Friedman, has written a very popular book called The World is Flat, and I wanted to emphasize that the world is not flat. He has argued that as a result of the new technologies, the world is on a level playing field. The developing countries can compete on an even keel with the advanced industrial countries. And obviously what he is focusing on is the fact that the global geography has changed. China and India are more competitive, but Africa is in some ways less competitive. It has neither the resources nor the education to take advantage of the new technologies. Not only is the world not flat, but in many ways it's becoming less flat. There is growing inequality between the countries, and there is a growing inequality in most countries around the world, and globalization has played an important role in these failures.

In fact, the growing inequality in the advanced industrial countries is something that was predicted by economic theory more than 50 years ago. And the way to illustrate this is to use of a thought experiment. This is something that's not advertised by the advocates of globalization and it's not talked about, but just think about the following thought experiment. What would happen if there were perfect integration of the countries of the world, if the markets were perfect -- we're nowhere near that point so don't worry -- but if that happened perfectly, what would the world look like? Well, it would mean that unskilled wages, unskilled workers, would get the same pay everywhere in the world. That's what we mean by full global integration. And that would mean that unskilled wages in Japan, the United States, and the U.K. would be the same as unskilled wages in China and India. That means that they would be much lower than they are today. And while we are nowhere near that, one of the results that my teacher, Paul Samuelson, showed was that even without perfect

globalization, just trade liberalization moves you in this direction and is a force for the lowering of wages of unskilled labor and increasing inequality.

Unfair trade treaties have compounded the problems in developing countries, and I'll talk a little bit about that later, but these problems are compounded by asymmetric liberalization. We've worked more for liberalizing capital, the flows of capital, than we have for labor, liberalizing more the flows of the capital intensive goods than of labor intensive goods. What does that mean? Well, what that means is that the bargaining power of capital is increased relative to labor because if taxes are increased or if wages are too high, capital will say, we'll go somewhere else where we're treated better. But workers can't do that. Particularly, unskilled workers can't move. So you've changed the bargaining power, and the result of that change in the bargaining power is a lowering of unskilled wages to the advantage of capital, and you see this pattern around the world.

As I mentioned before, one of the ways that globalization has played a role in the failures is that it has given advice that has not been good for development. Latin America followed the advice of the IMF and the World Bank. Argentina, for instance was the A+ student, and after the crisis in Argentina, other countries in Latin America would say, if this is what happens to the A+ student, we don't want to go to that school. The remarkable thing is that Argentina, after it got rid of the IMF, after it went into default, has been growing at 8% for more than four years. So now, not only did it catch up to where it was before, but it has actually exceeded its income in the pre-crisis level. The contrast between the transition countries following the Washington Consensus policies, and China and Vietnam which did not, is marked.

And finally, one has to note that Africa has continued to be exploited, even in the post-colonial world. Advanced industrial countries have been willing to take out the resources from these countries, from Africa, but have not really contributed to strengthening education, technology and the other things that lead to long-term economic growth.

Well, let me now try to describe some of the more particular problems in the global architecture and economic architecture. One of the sets of problems is in finance. One would have thought that globalization, with more advanced markets and more sophisticated market economies, would lead to more stability, but in fact, it's led to

more instability. There have been a hundred crises in the last 30 years. It's more unusual for a country not to have a crisis than to have a crisis. East Asia, of course is the most famous crisis, but as I say, it was only one of many crises that have marked the last three decades.

But equally disturbing is the fact that money is flowing from poor countries to rich countries. Last year, about half-a-trillion dollars went from developing countries to the advanced industrial countries. That's not the way money is supposed to go. It's supposed to go from rich to poor. It's going the wrong way. Money is going from the poor to the rich. Again, economic theory says the rich countries ought to be better able to absorb risk. But in spite of the advances and ability to slice and dice risk, the poor countries still bear the brunt of risk. They tend to borrow in short-term, hard currencies, and that means when exchange rate changes or interest rates sore, they are left bearing the burden, and that is one of the reasons why there have been so many crises around the world.

The advanced industrial countries have done a great deal to protect their own interests. There's been a rash of what are called bilateral investment agreements or investment agreements that are part of bilateral trade agreements, and they've tried to protect the investor interests, but little has been done to protect the interests of the developing countries, for instance, to protect the environment. And unfortunately, all too often, multinationals use the limited liability to protect themselves after taking out the natural resources.

In the area of trade, I mentioned before that the international trade regime is unfair to the developing countries, but the magnitude of this is sometimes unappreciated. If you look at the agenda of the Uruguay Round, which is the last round of trade agreements that was signed in 1994, it focused completely on the agenda of the advanced industrial countries. One of the major advances of the Uruguay Round is that it went into services. Well, normally we think services are labor intensive. Developing countries are labor rich. Shouldn't that be pro-development? But when they said services, they didn't mean services. What they meant is the services that the advanced industrial countries export, services like IT services and financial services. They didn't mean maritime services or construction services, the services that are unskilled labor intensive and are the

comparative advantage of the developing countries. So if you look at the agenda, it was framed around the interests of the developed countries.

There were actually four issues that were talked about at the beginning of the Uruguay Round. The developing countries wanted something done about agricultural subsidies and about textiles, and the developed countries wanted intellectual property rights, which should never have been in the agreement, and financial services. The developed countries got what they wanted, but the developing countries did not get any reduction in agricultural subsidies, and in the case of textiles, they were told to wait for 10 years. And then after waiting for 10 years, they were told to wait a little bit longer. Well, the result of this is that most of the gains went to developed countries. That wasn't so surprising. But what was so disturbing is that the poorest countries of the world, including sub-Saharan Africa as a whole, were actually made worse off.

The magnitude of the imbalance, the way the system is stacked against the poor countries, is highlighted by the fact that the OECD, the advanced industrial country tariffs on goods from poor countries, are four times higher than they are on the goods from other OECD countries. So in fact, if you look at the exports from a small country like Mongolia, it may actually be larger; the tariffs they have to pay are larger than the tariffs paid by a country like France. The whole tariff structure is designed to discriminate against developing countries, and actually to inhibit developing countries. The rich countries cost poor countries three times more in trade restrictions than their total development assistance. So, this just gives you an idea of the magnitude of the unfairness of the trade issues.

The agricultural subsidies are roughly equal to what the farmers produce themselves. So I sometimes jokingly say that American corn farmers are more accurately described as farming Washington than farming the soil because they get as much money from Washington as they do from the land.

It was because the Uruguay Round was so unfair that there was a need for the Development Round to address these problems. But what happened was not a development round. It was really an attempt by the advanced industrial countries to put old wine in new bottles, and some of the elements of what was called the Development Round were even anti-development. The problem is not only did they

just put old wine in new bottles, but the U.S. and the EU actually reneged on their promises, and the result of this is, I would argue, that the Development Round does not even deserve to be called a development round.

It is not surprising as a result that the developing countries are rejecting the Development Round. India and Brazil have basically said, we won't go along with the agreement. The fact is there is a lot of to-ing and fro-ing now; who's to blame for the breakdown. In my mind, it's clearly the advanced industrial countries, the U.S. and the EU. Some people have said, and to put that in perspective, to highlight what that means, the U.S. has offered to cut its agricultural subsidies by raising them by 50%. It says, okay, our offer to you is that we won't raise them by more than 50%. But you have to understand that raising them 50%, before that they raised them by 100% from what they were at the Uruguay Round when they were supposed to have reduced them. So first they doubled them, and then, we say, okay, we're going to make you an offer; the offer is that we won't raise them by another 50%, more than another 50%. And it's not surprising that the developing countries find this a little bit dishonest or disingenuous. Who is going to be hurt? Well, the fact is that if you look at where the Development Round has evolved, the benefits to developing countries currently are so small that they have very little benefit out of it, even if it's completed.

Another problem with globalization as it's managed today has to do with knowledge. Knowledge is an important aspect of globalization. I mentioned before that one of the bases of success of East Asia was that it was able to take knowledge from around the world and grow on the basis of it. One of the lessons of modern development is that what separates developing countries from developed ones is not just the gap in resources, but a gap in knowledge, so closing the knowledge gap is a central part of a development strategy. But an unbalanced intellectual property regime makes it more difficult to close that, and TRIPS, the trade related intellectual property provisions of the Uruguay Round, were unbalanced. They have reduced access to knowledge. But even worse, they make it more difficult to get access to life-saving medicines, and as a result of the last round, thousands of people will be dying. Not surprisingly, the developing countries have called for a development oriented intellectual property regime.

Another set of problems has to do with global warming and global climate change.



This is again, a global problem because global warming is the quintessential global problem. We all share one atmosphere. But it's another arena in which global social injustices are being played out. The major sources of pollution have been the advanced industrial countries. The major reason that the levels of carbon dioxide and greenhouse gases today in the atmosphere are much higher than they were in the pre-industrial age are the burning of the fossil fuels in the advanced industrial countries. But some of the major consequences lie in the South.

Finally, one of the reasons that there is such discontent with globalization is that other values have been dominated by economics. The environment is sacrificed for short-term commercial interests. There is reduced access to life-saving medicines; while no compensation is provided to developing countries for their environmental services either in biodiversity or carbon sequestration; no protection of traditional knowledge from developing countries -- a concept called biopiracy; worry about the fact that traditional cultures are weakened; restrictions on the ability to subsidize culture. And finally, democratic processes are undermined, for instance, by IMF conditionality.

What I've tried to describe so far is the many ways in which the reasons for the discontent with globalization are seen in terms of the outcomes. But there is also concern about the processes, the processes by which decisions get made. The concern is that global governance has been undemocratic, in particular, the voice of developing countries has not been heard, and even when it's heard it is not listened to. It's often dominated by the North, or more accurately by special interests in the North where the rules are made by the advanced nations for the advanced nations, or more accurately for the special interests within them.

We recently have seen the nature of the problems highlighted by what's happened in the World Bank. Here we have an institution committed to, supposedly, a multi-lateral institution committed to promoting development, but the head of it is appointed by the United States, and they appointed somebody whose major credential was that he was the architect of the war in Iraq; what you would not have thought was a strong credential for being the head of the world's major poverty fighting institution. And after he became the head, the agenda that he set for the World Bank was not an agenda that was focused on reducing poverty. It was corruption. He talked about corruption. Corruption is important. But the way he did it was actually corrupt.

He picked out the countries that were pro-United States and said, we'll ignore corruption there until they annoy the United States. The most famous case is that of Uzbekistan. Uzbekistan got a lot of aid until Uzbekistan told the United States, we want you to leave your air force bases, and then the next day, they discovered there was corruption in Uzbekistan. There are other cases where they talked about zero tolerance of corruption, and yet they wanted to expand assistance to some of the most corrupt countries in the world because they were allies of the United States. So the situation was really undermining the multilateral system and not focusing on what the World Bank is supposed to be focusing on, which is reducing poverty in the poorest countries of the world.

Well, you would have thought that an institution that keeps talking about good governance would itself have good governance. But it doesn't when choosing the head means not looking for the most qualified person in the world. It's whoever the president of the United State wants. And in the case of the IMF, it's whoever the EU wants. I think -- and one can show this, I think, very forcefully -- that governance problems have contributed to these bad outcomes.

I also think one has to recognize that the failures of global governance reflect weaknesses in our own democracies within the advanced industrial countries; the fact that so often special interests have dominated national interests. We talk about the cotton subsidies. It's not in America's interest to have these cotton subsidies that do so much harm. They go to only 25,000 farmers. We have to ask, how can 25,000 farmers do so much harm to so many? Ten million people in sub-Saharan Africa have their income decreased to benefit 25,000 rich American farmers. And most of the money goes to 10,000 of these. Well, it's an example of the fact of the role of special interests.

Moreover, globalization as it has been managed has actually undermined democracy because of the excessive conditionalities and the way these conditionalities have reduced the scope for democratic decision making within these countries. In many of these countries, they are told that it's so important to have democracy, and then the next thing we say, but by the way, on the things that are really important, you can't have any voice. The international community has dictated you have to do this and this and this.

To summarize, globalization has made us more interdependent, greater interdependence means greater need for collective action to act cooperatively. But just as the world has a greater need for global economic institutions, confidence in these institutions has waned.

The fundamental problem can be put simply that economic globalization has outpaced political globalization. Too often, views about democracy, social justice, social solidarity, even the rule of law, change at the border. I saw that so clearly when I was in the Clinton Administration. When we talked about issues of domestic economic policy, we would always talk about what was efficient, but we would also talk about what was fair. When it came to international economic policy, the word fairness never entered into the vocabulary. When we sent our trade minister, the U.S. trade representative to Geneva to negotiate a trade agreement, we didn't say, come back with a fair trade agreement. If he did that, he would be fired. We say, come back with the best agreement for America, and what we meant by that was not the best agreement for America, we meant the best agreement for our major campaign contributors. And that's what they did. So in intellectual property, another example, the Clinton Administration was committed to getting more access to health care and more access to medicine. That was one of the big issues in the 1992 campaign. But when it went to Geneva for trade negotiations, it focused on getting less access by making generic medicines unavailable to the poor countries. So it was doing exactly the opposite. Why? Because the pharmaceutical companies were contributing, and domestically, American citizens said, we want access to medicines. Internationally, people who don't have access don't vote, but the pharmaceutical companies make campaign contributions.

Democracies have learned how to temper the market economy to make sure that most individuals benefit, but we have not yet learned how to temper the excesses of globalization. And while globalization has put new demands on the nation state, for instance, those associated with growing inequality, it has reduced their ability to respond. And part of the reason that globalization is not working is that we have not yet really democratized globalization.

In some ways, matters have become worse in recent years because of the end of the Cold War. In the Cold War, we had to pay attention to the developing countries

because we had to win their allegiance in the Cold War. When we gave assistance to Mobutu in the Congo, we knew that the money was going in a Swiss bank account, but we were not trying to promote development, we were trying to get their allegiance in the Cold War. And it worked for that purpose, but it didn't work for development. At the end of the Cold War, we had a choice. We had a choice either to change international economic policy based on principles of democracy and helping the poor, or we had the opportunity to use power to make sure that the multinational corporations in the advanced industrial countries could get what they wanted because we didn't have to contend with winning allegiances in the Cold War. Well, unfortunately, we made the wrong choice. We let it be determined not on the basis of principles, but on the basis of special interests. We missed the opportunity for global leadership, and we used our position to advance parochial commercial interests, often in a unilateralist manner. But in the last six years, things have become even worse.

I want to emphasize though that the opposition to globalization is not to globalization itself, but to the way it has been managed, to both the way it's been managed to advance the advanced industrial countries' special interests, the fact that economic values have dominated other values in undemocratic processes, and to the particular set of ideologies that have underlain these policies, the market fundamentalism, and what's referred to as the Washington Consensus policies.

Well, as I said it's not globalization itself, it's the way it's been managed, and the reason I emphasize this is because I want to emphasize that change is possible. In fact I would argue that change is inevitable. The world is changing. There is new global geopolitics. Today, China is giving more aid for infrastructure than the World Bank and the African Development Bank combined. It's part of the new geopolitics. There are new technologies, the new economies, new scarcities associated with oil, and climate change, and globalization has set in motion its own changes. For instance, while the negotiators have been negotiating about cotton subsidies, the WTO panel has ruled that those cotton subsidies are illegal. So the U.S. is trying to continue something that WTO has already declared to be illegal. And the U.S. Congress right now is in the process of passing a bill continuing these illegal subsidies. So, the question is whether we make the changes before a crisis occurs in a way that is likely to be a patchwork, setting in motion another crisis at a later day, or whether we work

together to make globalization work, or at least to make it work better. One of the main points in my book, Making Globalization Work, was to lay out an agenda of the kinds of reforms that would make it work better, and I'll go through these just very quickly. In trade, have a true development round. And the point of this is that there is a much wider agenda than just agriculture. There has been too much focus on agriculture. There are lots of other things that would make a big difference. And as I put it here in this slide, if the developed world is willing to commit 0.7% of GDP to help poor countries, shouldn't they help them also by opening up their markets to give them an opportunity to earn income for themselves. I've argued that there should be generalized market access, expanding and extending the initiative that Europe has of opening up markets to the poorest countries of the world.

And here, I will just list a large number of items of what a true development agenda would look like. In the area of finance, there needs to be more extended debt relief, but more reforms are needed because unless we think about the reasons why so many countries have debt burdens beyond their ability to pay, it's going to happen again. And part of the reason for it has to do with the fact that we force developing countries to bear the risk of interest rate and exchange rate volatility, so we have to figure out better ways of shifting the burden of risk from those less able to those more able to bear that burden, which are the developed countries, and I describe how that can be done.

The most important reform in the global financial system is the reform of the international reserve system. Right now, the developing countries hold literally trillions of dollars, in dollars, in reserves. What does that mean? It means that they are lending money to the United States at very low interest rates. At one point they were lending the United States money at 1% interest and borrowing money from the United States at 20% interest. It's a bad deal. Now, they are at least getting 5%. But what we calculate is the total amount of foreign aid from the poor countries to the United States is larger than American foreign aid to the developing world. That is to say, the amount of implicit foreign aid from low cost loans from the developing world as they hold this money in reserves, you can think of that as a foreign aid package, and it's huge. There is the beginning of a move in the right direction in the Chang Mai initiative, and I describe in my book how that can be extended and how it actually can

create a more stable global financial system.

We need to have global legal reform, for instance, to make sure that those who destroy the environment are held accountable, that those areas where there is a lack of competition internationally, something is done about it; global monopolies are dangerous, and it's impossible in a globalized world to attack global monopolies piece by piece. And, we need an international competition authority.

One of the problems in Africa is that these countries face what is called the resource curse; the fact that on average, countries with rich endowments of resources grow more slowly than countries without resources, and a lot of research has gone into what is the reason for it and what can be done to escape it. But one of the important aspects of this that I will talk about here, of the three important points, one is greater transparency by expanding the Extractive Industries Initiative so that people know what the governments are getting. One way to enforce it overnight is to make only transparent payments tax deductible. A few years ago, bribes were tax deductible. In other words, governments in many advanced industrial countries were paying 50% of the cost to the bribe. They were subsidizing corruption. I was the representative of America in the ministerial meeting at the OECD where I tried to push this anti-bribery agenda, and there was a lot of resistance because it was the way of doing business. Well, a lack of transparency is a way of doing business, but I think it's one that's very bad for the developing countries.

The OECD had an initiative to reduce bank secrecy. Bank secrecy is important because the corrupt money goes out of the country. A lot of money is flowing out of Africa into these secret bank accounts where they are protected. The OECD had an agreement to reduce bank secrecy, and in August of 2001, the Bush Administration vetoed that initiative. In September of 2001, we all know what happened, and they discovered that some of these secret bank accounts were being used to finance terrorists. Since then, we've on the one hand shown that you can shut down bank accounts, secret bank accounts, and we've done it in the case of terrorism. But in the other areas, in the area of corruption, when the Bush Administration came out, when they vetoed that bill in August of 2001, champagne corks were popping all over the corrupt world. They were celebrating, and they have continued to celebrate. There is actually a book coming out in about six months detailing the expansion of secret

bank accounts since the Bush Administration veto, how it opened up global crime, and how it became a vehicle for corruption around the world.

We also need to develop model contracts that ensure that developing countries get their fair share of the resources.

In regard to global warming, I detail a whole broad agenda beyond Kyoto of what to do. One of them I just want to mention here, because it has begun to get resonance, and that is, it makes so much more sense to tax bad things than good things, to tax pollution rather than working savings. This is an idea that I've been pushing, and I'm pleased to say that about two weeks ago both Gordon Brown and Sarkozy in France endorsed this basic principle.

Finally, we need more foreign assistance. We need more of it, and more effective use of it. The advanced industrial countries have committed to give 0.7% of GDP. It's actually a commitment that they made a long time ago. They renewed that commitment at Monterrey, but except for a few of the Scandinavian countries, most of the countries are nowhere near to living up to that commitment. Global poverty is one of the most important problems facing in the world today. Assistance has played an important role in the past in reducing global poverty, and it can play an even bigger role in the future, especially when the programs are based on the successes of the past, successes such as those that have marked East Asia.

We now know much more about how to make aid effective. Japan, as the second largest economy in the world, has an especial responsibility for making globalization work, including working for developing countries, and I would also argue an especial opportunity because Japan understands development, because it went through the development process itself so recently. It understands the need for global, peaceful cooperation. The whole world has learned that military power doesn't get you very much. It's soft power that works. It's the civilian society that's important. Poverty in the developing countries is one of the major global problems facing the world. Japan has long been committed to promoting growth and fighting poverty in the developing world. The new organization which Madame Ogata mentioned that JICA will be evolving into puts it in a position to do so even more effectively in the coming years. Thank you very much.

## Panel Discussion and Question & Answer

**Mr. Kojima:** Thank you very much, Professor Stiglitz. Globalization and its various issues were pointed out, and the ways of resolving these issues, the areas that need to be addressed, have also been pinpointed.

Now we will proceed with Dr. Takashi Shiraishi. He is President of the Institute for Developing Economies and Vice-President and professor of the National Graduate Research Institute for Policy Studies. Dr. Shiraishi and the chief corporate advisor of Fuji Xerox Company, Mr. Yotaro Kobayashi, will be commenting on what Dr. Stiglitz said, including perhaps rebuttals, and questions will be asked by these two commentators as well. And we'll also be discussing the panelists' comments. And since this conference goes to 18:00, we'd like to give the floor, the audience, a chance to speak as well, and involve them in the dialog. So without further ado, Dr. Shiraishi, please.

**Dr. Shiraishi:** Thank you very much. Dealing with this much content, I was wondering if this could be discussed within 40 to 45 minutes, and he was able to do it. I was very surprised.

Now, we just heard Professor Stiglitz's presentation, and I was thinking that he is an economist and I am a political scientist, and the language that we use is different. What was interesting was, in his presentation, the state, the word state, was mentioned only once. The region, the word region, was never mentioned. I thought that was very interesting. On these two points I would like to make comments, and also I would like to raise some questions.

First, about the state, about the issues concerning the state. In the 1990s the Cold War ended, and in the post Cold War years, when we addressed the questions concerning developing countries, two liberalizations were emphasized; number one, economic liberalization, number two, political liberalization, meaning democratization. These were the points that were emphasized. However, in the 1990s, I think one lesson we've learned is that with these two liberalizations alone, developing countries politically cannot become stable and cannot grow economically. State institutions need to be established. That's a lesson I think that was drawn from this.



Now, this is evident from a “World Development Report” which featured state-building that was issued in 1997 while Professor Stiglitz was working at the World Bank. Thus, about 10 years ago it was pointed out that state-building is very important.

Now, with respect to state-building, what is really important? When you say state-building, it encompasses a variety of things; the establishment of a central bank, that may be part of it, or the creation of a primary education system could be a part of state-building, establishing a military would be one, or establishing the police would be state-building. So it's a very complex issue that is encompassed by this single word, state-building.

Now, against this background, regarding development, what is the most important aspect of state-building? That's one question I would like to ask Professor Stiglitz. Now, as far as I'm concerned, what I consider to be most important in state-building is that life and private property need to be safe, so there has to be enhanced predictability for life. But on this point, over the last decade, there is no consensus as to what is the most important aspect to do in state-building, so I'd like to invite Professor Stiglitz's comments.

Another point is region, the word region. As you are aware, in Asia, or in Africa, or in Latin America, when we talk about the region, we not only talk about the geographical region, but in different regions, there are different political and economic structures. Consciously or unconsciously, I think that's what we base ourselves on. Why do I mention this? Because when it comes to East Asia, I think you can say that it's a very interesting region. Why do I say this? Now, in the East Asian region, we have Japan, South Korea, Taiwan, and Singapore. These are economically developed countries or territories, and also on the other hand, we have Cambodia, which up until a decade ago was a failed state as the people called it. But then, gradually, security got better and of late, direct investment from abroad is going into the country, which is starting economic growth. Still, this is a developing country. So in this kind of region, in effect economic integration with direct investment is progressing, and based on that economic partnership or by way of FTA, effective economic integration institutionally is being supported. At least an effort is being made to do that.

Now, with the FTAs in East Asia, the economists who study those say it's a

spaghetti bowl effect or noodle effect, but to me, the countries that have already developed economically, and the developing countries, in one way or another, are institutionalizing the integration, while economic liberalization and economic cooperation or economic assistance are exchanged through deals. I think East Asia is the first region where that is occurring. In this connection, as was mentioned before, Cambodia, ten years ago was a failed state, but gradually economic growth is occurring. If that is the case, then when it comes to regional issues, perhaps not only do we have to consider that globally but there is a point in considering these issues regionally, and I would like to again invite Professor Stiglitz's comments on this point.

**Mr. Kojima:** As a footnote, the World Bank came out with an Asian miracle report in 1993, and this year, two months ago, the World Bank published a new report. The title is East Asian Renaissance. At the time of the Asian crisis, according to Washington Consensus perspective, countries in East Asia were crony capitalists and bad students, but now they are in renaissance. So I think regional issues may be very important.

Now, Professor Stiglitz, perhaps before getting comments from you, I would like to invite comments from Mr. Kobayashi. In globalization, actually the market-led globalization, companies play a central role. Business globalization is the most important factor. So as a business leader, Mr. Kobayashi, maybe you can give us some comments or raise some questions.

**Mr. Kobayashi:** Thank you very much. I greatly appreciate this opportunity to participate in these discussions. I have asked Mrs. Ogata to do a speech in an affiliated organization of mine, and I agreed to participate in this discussion. To tell you the truth, I'm a little bit worried because I'm a layman, but I'd like to do my best to address the very thought provoking presentation that was given by Dr. Stiglitz.

I'd like to summarize my talk into three or four points, one of which is what Professor Kojima referred to, that is with regard to what Japan can do, and Dr. Stiglitz mentioned this towards the end -- and what can businesses do, what they can conceivably do. These are the points that I would like to state my impressions on.

Firstly, the content of globalization is changing. In 1820, China and India

accounted for 45% of the world's GNP. The globalization was such that a leading role was played before by India and China. Now, it's the United States. But a leading role is played by different actors now, and we tend to forget who played the leading role in the past. The other day in Kobe, there was a commemorative ceremony on Sun Yat-Sen, and in 1924 Sun Yat-Sen, was invited to Kobe, and he did a presentation. That was 1924. But now we are in an era in which the United States and Europe wield by far the strongest power. But until several hundred years ago, Asia was by far the most central power in the world. The Japan-Russo War had just ended, and Japan was in a position to conclude a lot of bilateral agreements. Professor Stiglitz talked about very meaningful bilateral agreements, but Japan was forced into enter into unfair agreements. But this was rectified, and this played a central role in Asia's independence according to Sun Yat-Sen.

Recently, globalization issues are becoming worse, and that has been clearly pointed out by Dr. Stiglitz. Dr. Stiglitz, an American and a former senior economist of the World Bank, is a central figure at the time in the creation of the present day system. But he is doing a self-renouncement, a self-recrimination. So in that sense, I am very impressed. And I'd like to rebut and say, maybe it's not as bad as he makes it out to be. But in any case, it seems like there are lots of problems and perhaps that is a fact.

As the advanced countries, especially partial interest groups amongst them, are pursuing a profit, and the Development Round does not even deserve to be called a Development Round. To put it bluntly, American cronies are in one camp, and they are the only ones that are benefiting, and all others are totally left out of the picture. We have to acknowledge this fact.

So, if we look at the world in terms of the advanced industrialized countries and the developing countries, in Japan we talk about globalization. But if we replace that word with reform, by reform preceding the differences, the gaps are widening. There are different views. Especially in Japan, the local prefectures are suffering, and that issue is becoming a large issue, and that's a part of the results of the upper house elections. Reform widening regional differences in Japan on one hand and globalization widening the gap between advanced countries and developing countries ; the two issues have similarities.

The other point among the developing countries, there is a bipolarization that has been seen. The 48 least developed countries are seeing a worsening of their situation, and China and India are becoming almost a threat to the advanced industrialized countries, including Japan. How are we to address this situation? Of course, that's the next challenge for the advanced industrialized countries. Dr. Stiglitz has said that a more mature democracy is the key. But I think that is idealism. When you look at the reality, we have to address the subject of how to make globalization work better in terms of, for the time being at least, addressing the tug of war between countries. It's a pretty hard ball game we're playing, and that's the reality.

The direction, however, is such that the countries that are called developing countries, with China and India at the lead, will increase their presence, and that is without a doubt. And if we assume that, at the present point in time as the advanced industrialized countries, we have to look at China and India and also at Africa, which are behind, and which are trying to catch up quickly, we have to think about what we can do for these countries, and we need to exercise ingenuity. And I am one hundred percent in concurrence with what Dr. Stiglitz had to say.

In the case of Japan, as part of the industrialized countries, as a very realistic issue, we tend to look at China and the more developed developing countries, there is always a threat that we might be crushed by their threat. But in the short-term, how we address this is something that each country needs to address. But in the medium- to long-term, I think that we need to have a proper awareness of the issues.

In relation to this, I'd like to talk about Japan and the role of business. Japan, until most recently, was trying hard to catch up to the industrialized countries. We were a developing country. Do the Japanese really remember the past? When we talk to China, or when we talk to countries in Asia, we act as if we have been for a long time a member of the developed countries. But until quite recently, we were in pretty much the same position as China or the other countries of Asia. Economically and politically, we were in a similar situation, and we seem to have forgotten that, or maybe we want to forget; we don't want to think about the state we were in before, and that seems to be the situation. And Dr. Stiglitz said that we have to leverage our experience and play a very important role, and I think that was a very important message.

In the case of business, I might be chided by the business representatives here, but let me say the following. In the business world, patents -- this is related to the IT issue. In licensing, whether to go along with an open policy or closed policy is being debated, whether we impose a zero license fee and not charge a license fee at all. It's not that we are doing this for welfare purposes, but we're doing this because our markets will be expanded. If we monopolize things, rather than generate a lot of profit, to expand the profit is better, some would say. And that is related to the discussion between developing countries and developed countries. When talking about the WTO rounds, the issue of services, or technology, or knowledge has been mentioned in this regard. Basically, that kind of thinking is very important.

On the other hand, the developing countries must create a proper structure for ensuring governance. We may intend to expand the market, or we may transfer technology to expand the market, but maybe the benefits will only go to the few higher income bracket people, so that will not do. So there needs to be proper governance.

We have to remember what state we were in twenty and thirty years ago. We must help and cooperate with a sense of humility, and I very keenly felt this. These were just my impressions, Dr. Stiglitz. Thank you.

**Mr. Kojima:** Thank you very much again. A footnote. Toward the end, Mr. Kobayashi mentioned the state that we were in over thirty years ago. Well, actually the Olympics are going to be held in Beijing next year, and in 1964 we had the Tokyo Olympics. *Shinkansen*, the bullet train was built then. Money came from the World Bank. Without that, we wouldn't have been able to build the *Shinkansen* lines.

Now, we have heard some comments from the two gentlemen, so Professor Stiglitz, could you give us your comments?

**Prof. Stiglitz:** Thank you very much for those comments. Let me just make a few comments and then have a chance to open it up for discussion from the floor. I want to very much emphasize and agree with the point that was made about the importance of strengthening the state, and the question is, what role do I think the state should play. Well, I think actually, in the process of development, there are at least two distinctive roles that one ought to focus on. One of them is what is called the

developmental state, the role of the state in catalyzing development, and it's that role which I think has been insufficiently emphasized by the World Bank and by the IMF and by other people in the Washington Consensus, that actually was the key to success in East Asia, that each of those countries used the state in an active way to promote development.

Now, one of the interesting things is actually, the U.S. government was also a developmental state at an earlier stage of its development. In the 19th century, the main industry was agriculture, and the U.S. government established the land grant colleges, and not only established the land grant colleges to do research and teach in agriculture, mining, and applied subjects, but also developed extension services to bring the knowledge to the individual farmers. So it was based on the notion that the government had a responsibility to bring advanced technology to the individual farmer. It's a very different view than a passive state. It was a very activist state.

The U.S. government laid the first telegraph line in the world between Baltimore and Washington. It began the telecommunications revolution of the 19th century, and then, in the 20th century, paid for the creation of the Internet. It then in both of the cases turned it over to the private sector. But in both of these cases it played a catalytic role. It played a catalytic role in creating mortgage markets and financing small businesses, Federal Express, the whole private postal business was supported by a loan from the Small Business Administration.

So, particularly in developing countries where the entrepreneurial class has not been as developed, there is a special role, I think, for the state to encourage development.

Another role, though for the state is protection. One of the themes, one of the areas that the U.N. Commission that Madame Ogata was on with Professor Sen was highlighting the importance of human security, and the state plays an important role, again, particularly when markets aren't there. In advanced industrial countries, you can buy insurance. But even in the United States, 50 million Americans do not have health insurance. They have no protection against the ravages of illness. Unemployment insurance. The private sector has never provided unemployment insurance. Retirement, pensions. The transaction costs in the government Social Security System are a fraction of the private sector, and the private sector still does not

provide insurance for retirement that protects you against inflation. So there are a whole set of risks that the private market isn't able to provide and for which the state has an important role. That role will differ depending on whether it's a developing or a developed country, and from time to time, change from country to country and time to time. That was why in the 1997 report of the World Development Report we emphasized the importance of strengthening the states.

And I think this fits in very well also with the remarks that Mr. Kobayashi made, which is that development is complex and requires all the players. It needs business, it needs the private sector, it needs civil society, and it can't be one to the exclusion of the other.

When one describes what happened in India to its growth, that led to its growth, one of the things was that the government had had an anti-business attitude before the early 80s, and then in the early 80s it changed its attitude and became more pro-business, and it was that single change from being anti- to pro-business, that did more than anything else, that led to the change in India from growing at two to three percent to growing at five to six percent. So, I think we need to realize that one needs a strong state but also a strong private sector.

I want to comment, also spend a minute on another item. In terms of strengthening the state, there is no easy formula to strengthening the state, but one of my concerns is that actually in many ways globalization has led to a weakening of the state. It has restricted what the state can do, it has put more demands on the state but lowered the capability of the state to respond, and that one of the problems of the strategies that were pursued by the World Bank and the IMF in the 70s and 80s in the structural adjustment in which they focused on the minimal state, was that they actually weakened the state. One of the examples that was cited was of Cambodia as a failed state, and we now realize that when we have too weak of a state, the society can't grow, government, you can't grow. So, some of the strategies of the past actually led to a weakening of the state. We really need to help strengthen the state.

One of the most interesting initiatives that I was involved in when I was in the White House was called "reinventing government," where what we did is we went through each and every department, every agency, and we asked the following questions: 1) what is the reason for the government, 2) what are the functions that it is

supposed to do, and 3) could we do that more efficiently; were we doing it in the best way; were there other ways of doing it? So, we didn't begin by asking, how do we strip down the government? That wasn't the issue. The question was, there were certain functions that need to be performed, the question was how to do them more effectively. That's part of building up the state and strengthening the state. That's an example, as I say, of the kind of process that can help make a stronger state and a more effective state.

Now, I want to make a comment about regional cooperation and regional development. I think there's absolutely no doubt that success is contagious. The success of Japan had a lot of influence on the neighboring countries, on Korea, on Taiwan, on Hong Kong, and those successes had a lot of influence on Thailand, on Malaysia, on Indonesia. So, if you look at what has happened in the region, it's an example of the contagion in the positive sense, that each learned from the other, each asked the question of what were they doing, what they can't do and what they can do. And so there was a real spread.

The business community played a very important role, but actually so did development assistance. If you look at that history of the movement from Japan's success to the success of all of East Asia, it was Japanese firms working together with development assistance. Where there was infrastructure being constructed, it was actually a very close cooperation where Japanese businesses worked with the Japanese government and said, well, what infrastructure was needed for the success of the business, and what policy advice would be needed for the success of the business. It was a real case in which the same kinds of cooperation that had helped lead to success in Japan were part of the success, the basis of the success, for other countries of East Asia. And I think that kind of cooperation is needed once again.

Your remarks about the "East Asia Renaissance" --- actually what is remarkable was how short-lived the economic downturn of 1997 was. It was actually a blip in historical terms. Now, of course when you're going through a crisis, you don't feel that. It was an exciting time because you don't know, you see things going down, and you don't know when it's going to stop and how fast it's going to turn around. But the fact that it was what is sometimes called a V-shaped turnaround, for most of the countries a very quick turn around, I think is evidence that it wasn't a fundamental



problem with the model of development. In fact my diagnosis was the major problem of excessively rapid capital market liberalization in countries that weren't ready for it, that led them, exposed them to certain kinds of market failures like a real estate bubble or a stock market bubble, that the economies were not really well-equipped to deal with. It was really that the state didn't have the regulatory capacity and the macroeconomic capacity to deal with the liberalization that got ahead of those other aspects. So in a sense, the word "renaissance" may be incorrect because one should really see this as a continual growth path with a little blip in 1997, and that there was, I think, a misdiagnosis on the part of the IMF suggesting that there was something more fundamentally wrong than there was.

Let me just stop there and open it up for questions, and then come back and talk about some of the other issues that were raised.

**Mr. Kojima:** Are you satisfied with his response?

**Dr. Shiraishi:** One point if I may ask some further questions on the following point, that is the issue of the developmental state. Indeed, Chalmers Johnson talked about postwar Japan's development, and he explained that, and when he explained it, he used the words "developmental state," and he introduced this concept. Since then, in Korea, and in Taiwan, to explain the economic development, this developmental state concept has been emphasized. And Chalmers Johnson's way of using the word, I don't know whether I'll be using it the same way, but I would like to use this word, this expression more loosely. These would be different from the regulatory story. These states exist, and they are different from the regulatory state, and I agree with Chalmers Johnson on this point. But the issue is, within globalization, when globalization evolves, what can the developmental state do? It becomes harder and harder to find what to do. And the state that acts as a gatekeeper no longer can protect the domestic economy when globalization proceeds. So, when globalization proceeds, what is a role of the developmental state? Is there any role left for that kind of state to play? I'd like to ask this point as a further question to my previous one.

**Prof. Stiglitz:** I think you raised a very important question that many developing countries are feeling very strongly about. They worry that globalization, the way it's managed, has reduced their policy space as it's called, their scope for action, and one of the real challenges for those of us who are advising developing countries is, given the rules that the WTO has, how can developing countries continue to play the role of the developmental state with those restrictions? I think the answer is they still can. It's more difficult. Japan had an easier time before the WTO than countries do today.

But it's still clear, for instance, that to give you an example, Brazil has succeeded in developing the Embraer airplane, which is a very major success as a regional airplane. Brazil has developed bio-fuels to the point that all the cars in the country work on a flexible bio-fuels, and Brazil is one of the first countries to get energy independence by using bio-fuels. And in a way, it's way ahead of the United States. To give you this comparison: to keep sugar-based ethanol made in Brazil competitive with corn-based ethanol made in the United States, the United States has to subsidize corn-based ethanol by 50 cents, and tax sugar-based ethanol by 50 cents. So it has to introduce a dollar-a-gallon wedge because Brazil has been so successful in developing its sugar-based ethanol. Now, that's a real success case, and it's a real important case because of global warming. It really makes a very big difference. So, those are examples for which I still think there is scope for the developmental state, but it is a challenge because the hands are tied to some extent.

**Mr. Kojima:** Then, from the floor, I'd like to entertain questions from the floor at this point then. Please raise your hand and wait for the microphone to be brought over to you. The person in the middle.

**A participant(1):** First, about the development aid and globalization, could you elaborate on the relationship between development aid assistance and globalization?

And within in the United States, needless to say, the government, but regarding globalization, within the public maybe there are people who are opposing globalization. But do you think globalization is the trend of the times?

**Prof. Stiglitz:** Okay. Actually the subject of globalization has become very

controversial, not only in the United State, but in Europe, and in many of the advanced industrial countries, as well as developing countries. It's ironical because globalization was supposed to make everybody better off. If it made everybody better off, everybody would be supporting it. And yet what's remarkable is it has united people in opposing it. And the question is why. One of the arguments that I've put forward is that even when it leads to more growth, it also has led to more inequality, and so the benefits have not been equally shared. This has become a major issue in the United States because in the United States particularly, there is growing inequality in a very serious way. Globalization is only one of the factors contributing to the growing inequality, but it's one of the factors that people feel they can do something about. So, there are other factors like changes in technology and the weakening of unions. They feel like they can't do anything about technology.

The magnitude of what has happened in the United States is just beginning to be grasped. There was a study done just a few weeks ago that pointed out that the median American worker in their thirties today is actually poorer than the median American worker in the thirties 30 years ago. So we've had a generation of decline at the middle. It's been worse in the last six years. So, while America has grown every year -- two, three, four, five percent -- today, most Americans are worse off than they were six years ago. So, all of the growth has gone to a few people at the top, and that's now becoming a major economic, political, and social problem.

Now, at least the Democratic candidates for president are struggling with how can they, how to deal with globalization. A particular slogan that I've been talking about is, how do we protect the average American without adopting protectionism? Can we keep an open economy, a liberalized economy, but have the average American protected? I think the answer is yes, but it will require things like more progressive income taxes, better safety nets, more education, more training programs, and more job retraining programs. It requires, to go back to what we were talking about in terms of the role of the state, it requires a more active state.

And it's interesting. If you look around the world, the countries that have been more successful with globalization in the sense that the average person has done the best are the Scandinavian countries, and the Scandinavian countries are the countries with the highest tax rates. One of the myths about globalization is that some people

say, to succeed in globalization we have to lower the tax rates. That's totally wrong. What you need with globalization, because it's putting more stress on society, you need a stronger state. A stronger state means that you have to do what you do more efficiently and more effectively, but it also takes resources, and that means taxes no matter whether you like it or not. So, I think it highlights some of the forces going on at a global level in regard to globalization.

I want to comment on the nature of knowledge as a public good, and the importance of knowledge in development. This is also something that is quintessentially or essentially an area where government is needed. There's a technical term that economists use that they say, knowledge as a public good, by which they mean, the marginal cost of another person using knowledge is zero. If I know something and I tell you, you also know it, but I also still know it. It's different from a private good like a chair. If I'm sitting in the chair, you can't sit on, or you can't sit on comfortably. If I eat something, you can't eat it. But knowledge is different. Actually this idea of knowledge as a public good was talked about by one of America's early presidents, Thomas Jefferson, who said knowledge was like a candle. When one candle lights another, it doesn't diminish from the light the first candle. He was a very strong supporter of government in a developmental state role, government in promoting education. He helped found one of the earliest universities in America; the University of Virginia. So very early on, it was recognized that it was important to have a state to promote education because knowledge is something that has a public collective nature about it.

So one of the things that has been, that I think where the Washington Consensus went wrong, was that it didn't understand; it talked about the minimal role of the state rather than a balanced role of the state. What did the state need to do and what did the private sector need to do? Where do they need to be a partnership? Where do they need to be complementary? And how do they act in a complementary way? It is a fundamental issue that I think every society faces, but I think unfortunately, Thatcher, Reagan, and Bush have all oversimplified the nature of that debate. It's a more complex debate, and by oversimplifying it, they've actually set the agenda back in a very important way.

**Mr. Kobayashi:** Very briefly, on what Dr. Stiglitz and Dr. Shiraishi mentioned in terms of the developmental state -- that's *kaihatsugata keizai* in Japanese, I think we should re-examine this issue. There were a lot of bashing regarding Japanese industrial policy. At the Japan-U.S. business council, we argued about the industrial policy in Japan, and some Americans criticized the so-called iron triangle made by politics, bureaucrats and business, but some said that America had exercised industrial policy in relation to the Department of Defense, and there also was the agricultural policy in the U.S. But in relation to education, in the case of Japan, since the pre-war days, we had a rather high level of homogenous education level, and in administration and in politics and in the economy, we had high-quality people and so we could create a rather advanced system. So, I believe that so far as transparency had been ensured, it would have worked. But it was a rather inward-looking, and it was not transparent to the external world, and that was the problem with our Japanese system in the past.

Moving ahead, going forward in the developing countries, a certain variation of the industrial policy is perhaps worth considering, especially in terms of the government's role, or different sectors' roles. If these are taken into consideration, I think there would be some merit in that.

**Prof. Stiglitz:** I agree very strongly, and one of the things that I've been involved in over the last few years is discussions with some African countries. I have a little NGO called the Initiative for Policy Dialogue, and we have an Africa task force, and one of the main ideas in this Africa task force is the applicability of the concepts of industrial policy to Africa. Prime Minister Meles of Ethiopia, South Africa, and a number of countries are discussing this idea, and actually not only discussing it, implementing these ideas, and implementing them successfully. So, the question is, I mentioned there are different rules today, the world is different today, so you can't quite do it exactly in the way that it was done in the past, but the basic idea is one that is very important.

As I say, I think the United States has an industrial policy. It's a very inefficient industrial policy because it's all embedded inside the Defense Department. So we promote lots of innovations, but we spend a hundred dollars to get one dollar of

innovation. But the Defense Department has been one of the major sources of innovation in our economy, and so we should recognize that almost every successful country has had these policies. So the question is not whether you should have them, but how you design them to be most effective.

**Mr. Kojima:** Last question, please. The person in the second row, please.

**A participant(2):** Thank you very much. I am working in Japanese financial institution, so in connection with the previous discussion on the role of the state, I would like to get your opinion on the role of the financial system, or financial infrastructure inside the developing countries because you wrote so many papers and books on the so-called information asymmetry. So, how do you evaluate the efficient, transparent, financial market's role, including the so-called microfinance in the developing countries? Thank you.

**Prof. Stiglitz:** I think that good financial markets are essential for successful development. Access to credit makes it at least a lot easier to develop. But markets by themselves don't develop. In the case of Japan, in the early stages, the government played a very important role in long-term capital in creating investment banks, and this is true in other countries as well. Traditional banking focused on short-term working capital, which is important, but not adequate for financing long-term investment. So there is an important catalytic role that government may need to play in helping financial markets to develop. Even when they are developed, when banking institutions, for instance, exist, there is a real problem in recent years, and this is related to the WTO, where foreign banks have come in and taken over domestic banks, and in some instances become more interested in lending to multinational corporations and large companies within the country or to governments, rather than lending to small and medium sized enterprises. A recent study that we did at Columbia showed that the opening of foreign banks systematically leads to less availability of finance for small and medium sized enterprises and to lower growth. Some people have said, financial market liberalization will lead to more growth. The evidence is not there. And even a recent study in the IMF confirmed this kind of

result. And it's what theories of information asymmetry predict. That is to say, foreigners know less about domestic markets, especially small and medium sized businesses, and so they are more likely lend to those where they can find out information like the multinationals and have security abroad. So, we have a task force at the Initiative for Policy Dialogue that is focusing on precisely this this issue -- how can developing countries make sure that there is wider access to capital?

One of the unfortunate things about the East Asia financial crisis was everybody started focusing on strong, sound banks. Well, we know how to create strong and sound banks. If they just invest in U.S. T-bills or T-bills from Japan, you have a strong bank. But the bank doesn't help the economy. So, the point is that the function of banks is not just put money into T-bills. It's to help make credit available for economic growth. So, how do you combine the issue of stability with the issue of access to finance? And that's one of the issues that we're trying to address.

There are some policies that a few developing countries have pursued, or are talking about pursuing. For instance, India passed a law that required foreign banks that wanted to open up many branches, to open up branches not just in Delhi and Mumbai, but to also open up branches in other parts of the country that were underserved. In the United States, we have an important law that we call the CRA, Community Reinvestment Act, where we require all banks to reinvest a fraction of their deposits in underserved markets, and I've been urging governments to adopt similar kinds of legislation. So, there are strategies that one can adopt that can lead to more access to credit. But the idea is that finance is important, and you have to have finance across the whole spectrum.

Now, microcredit is very important, and there's been a major expansion of the availability of microcredit, especially since Yunus got all the attention with the Nobel Prize. But microcredit is important in raising living standards of those who are very poor, but isn't really adequate as a basis for sustained growth because the credits are too small. They are not at the size of what we call small and medium sized enterprises where you are hiring employees. Therefore, there are examples of a woman raising chicken in her spare time, which will increase her income from maybe \$200 to \$300, or \$300 to \$400, which is very important. You know, it's 25%, 30% increase of her income -- a very big difference. But that's still not the basis of

sustained economic growth that you want to see in successful development. And so, one of the real worries is that we are covering only the very small. The big businesses are getting loans, but it's the stuff in between that is being left out, where there is a real need right now for money.

**Mr. Kojima:** Thank you very much. We've exceeded the scheduled time. Let me express my impressions of the discussion. And then, we would like to wrap up. This has been a major theme. I think this is a theme that needs to be continually discussed over the 21st century. This is comprised of the lighted areas and shadow areas. Of course, if there is no light, there are no shadows. But if you deny globalization, the light, then there can be no development. The development itself would be denied. So the light aspect of globalization should be emphasized, and we should try to reduce the shadow aspect to the extent possible. When you say 9.11, well, you always think of the terrorism in 2001 in the United States, and I think that's the shadow aspect of globalization. That signifies the shadow aspect.

Again, as was alluded to in the question, what about in the United States? In 1999, December, there was Seattle meeting of WTO, at the ministerial level. I think that was symbolic. In the United States, there were people that represented anti-globalism, and that spread throughout the world, as did the demonstration of anti-globalization. Well, in all major conferences there are always anti-globalization demonstrations. But when it comes to the 11/9, not 9.11, that was the collapse of the Berlin Wall in 1989, a new version of globalization started with that, and perhaps for the time being, that will be with us in the 21st century.

And also after that, investment was also discussed. Now, in terms of economics, in the process of globalization, the most important engine is direct investment that goes across borders. In the Cold War era, the cumulative sum of direct investment up until 1988 was a little over \$1 trillion. But after the Cold War was over, the direct investment, the FDI, skyrocketed, and just in 2001 alone, the cumulative sum was exceeded. There was more than \$1 trillion of direct investment in 2001 alone, and so the major division of labor globally, and the countries that accepted that investment grew. He mentioned India and China. They are typical examples. That's what happened.



But with respect to shadows, another important point as was reported by Professor Stiglitz in his presentation in connection with the role played by the state and the private sector, I think the public policy is becoming increasingly important because as globalization progresses, and market driven changes occur, and in the private sector capital including FDI, unless there is profit, capital is not used. If there is too much risk, they don't go to the markets. So, in the market process to begin with, well, if there is a confusion, political confusion, economic confusion, and social confusion in some countries, well, there are some countries that find themselves in a vicious spiral. With economic improvement there can be improvement politically and socially. But because of those countries that are in those circumstances, the market driven capital would not go to these countries.

And also after the Cold War is over. During the Cold War, the East bloc and West bloc, they wanted to increase the countries in their camp so they provided assistance. But now, the Cold War is over. To get alliances, you don't need to provide any assistance to get more partners. And ODA and other kinds of assistance, well, there is some sort of ODA fatigue occurring after the Cold War. There is an increasing global capital or private sector capital, but I think there has been a decrease in the state capital or investment. As a result, countries that are left out of the marketplace are not getting enough light. In the G-7 and G-8, these are the issues that have been increasingly discussed. In this process, on the part of the state, the states should cooperate globally and address these issues, and I think this is something that we actually need to do.

Now, today, we had active participation from the people on the floor. I saw a lot of hands that were raised, but due to time constraints we were not able to entertain all the questions. But today, we have had Professor Stiglitz, Mr. Kobayashi, Mr. Shiraishi; thank you very much for the contributions.

---

Dr. Ogata, Mr. Kojima, Dr. Shiraishi, Mr. Kobayashi and a participants (1) originally spoke in Japanese.

The English transcript is based on the simultaneous interpretation in English.

配布資料

Hand out

# GLOBALIZATION AND DEVELOPMENT

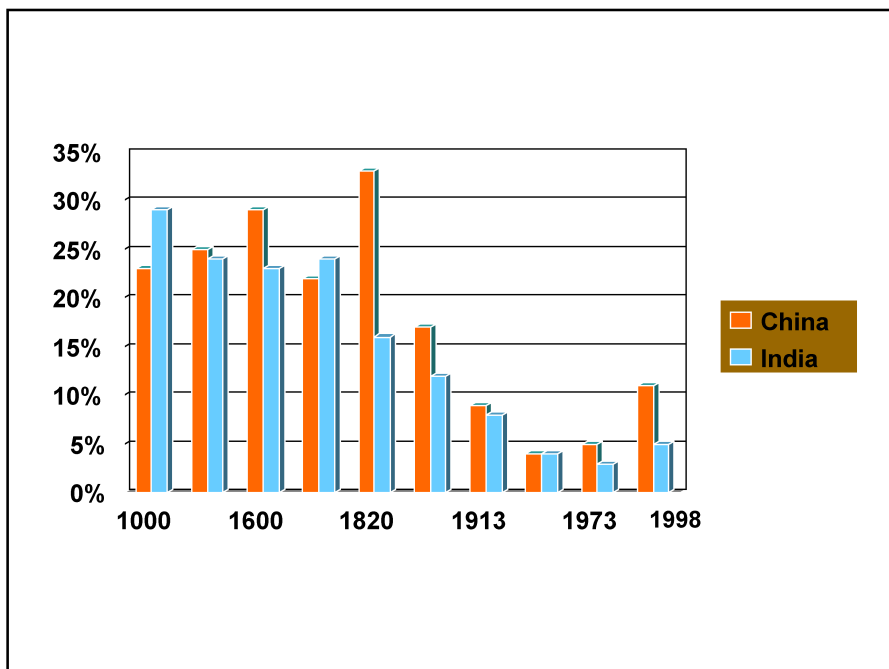
JOSEPH E. STIGLITZ  
TOKYO  
JULY 2007

## The Successes of Globalization

- China and India, with 2.4 **billion** people, growing at historically unprecedented rates
  - Continuing the successes of the East Asia Miracle, which Japan had led beginning in the early 1960s
  - Countries that were marginalized, excluded from the global economy are closing the gap between themselves and advanced industrial countries
    - China at close to 10% for 30 years
    - India recently at more than 8%
  - Engine of global economic growth
    - Global growth at 5% for past couple years has been almost historically unprecedented
    - Increased demand for commodities has helped developing countries

## Historical Perspective

- 1820: China had 1/3 of global GDP, India more than 15%
- 1814-1828: Industrial Revolution and tariff barrier knocked out Indian exports
  - Indian textile export to Britain fell by two-thirds
  - British export of textile to India rose five times
- Opium wars, and other external and internal problems had contributed to China's declining share



## Globalization has played major role in their success

Globalization—the closer integration of the countries of the world as a result of lower communication and transportation costs and reduction of man made barriers to movements of goods, services, people, capital, ideas, knowledge

- 50 percent compounded annual decline in telecommunication cost in the 1990s
  - Fiber optic glut during the Internet Bubble slashed telecom cost
  - Scanners convert data to image file - 160 pages per minute.

Developing countries have benefited through

- Access to markets
- Access to technology

## Discontent with Globalization: Outcomes

- Failures in development: contrast between success in East Asia and disappointments elsewhere:
  - Latin America—growth even in the 90s half of what it was in earlier decades
    - Benefits of growth going to upper income groups
    - Growing poverty, unemployment, crime
    - Growing fraction of population in informal sector, without job protections
  - Africa—decline in per capita income
  - Economies transitioning from Communism to market
    - Given inefficiencies of communism, success should have been easy
    - But in fact, there were massive decreases in income, huge increases in poverty

## The World is not flat

And in many ways it is getting less flat

- Growing inequality between countries
  - Standard economic theory predicted convergence, instead, there was divergence
- Growing inequality in most countries

## Globalization has played an important role in these failures

- Predictable effect on inequality within advanced industrial economies
  - Effects on developing countries harder to explain
- Unfair trade treaties have compounded problems in developing countries
- Problems compounded by asymmetric liberalization
- Africa has neither resources nor education to take advantage of new opportunities

## Globalization has played an important role in these failures

### Latin America followed advice of IMF/WB

- best “student” of Washington Consensus policies
- Capital market liberalization exposed them to huge volatility; privatizations were often corrupt

### Contrast between Transition countries following Washington consensus policies and China and Vietnam (which did not) is marked

### Africa exploited even in post-colonial world

- Exacerbating general problem of inequality
- But had been left without the education, technology, and resources to take advantage of new opportunities

## Further problems: Finance

- Growing instability—100 crises in last 30 years
- Money is flowing from poor countries to rich
- But, in spite of advances in ability to slice and dice risk, poor countries still bear brunt of risk
  - Meaning that many are burdened by huge debt payments
  - One of sources of crises
- Much done to protect investor interests
- But little done to protect the environment in developing countries from investors
  - Who use limited liability to protect themselves after taking out natural resources
  - Bilateral investment treaties are one-sided

## Further Problems: Trade

- International trade regime is unfair to developing countries
- The Uruguay Round Agenda focused on the interests of rich countries; it included
  - Services - but not unskilled labor intensive services;
  - Subsidies - but not agricultural subsidies;
  - Intellectual property rights
- Most of projected benefits accrued to rich countries
  - 70% of gains to developed countries
  - The 48 Least Developed Countries were actually left worse off

- System is unbalanced, stacked against poor countries
  - Average OECD tariff on goods from poor countries is 4x higher than on goods from other OECD countries
  - Rich countries cost poor countries 3x more in trade restrictions than their total development assistance
- Little progress on agricultural issues
  - OECD countries continue to subsidise agriculture by 48% of total farm production, just 3% lower than 1986; maintain high tariffs



- There was a need for a Development Round to address these problems
- But the Development Round agenda was mostly putting old wine in new bottles
  - Some elements were even anti-development
- And US and EU reneged on their promises
- As it is, the round does not deserve to be called a development round

- Even if successfully completed, would do little to benefit developing countries
  - Problem not just in agriculture
  - Also in manufacturing—escalating tariffs
  - US refusal to go along with opening up to poorest countries
    - EBP (Everything but what you produce)
  - Non-tariff barriers
- Risk if completed—belief that it was a development round, return to earlier regime
- Risk if fails—continuation of bilateral trade agreements
  - Even more unfair to developing countries
  - Undermining multilateral trading system

## Further Problems: Knowledge

- One of main problems facing developing countries is reducing gap in knowledge
- But unbalanced intellectual property regime makes this even more difficult
- And makes access to life saving medicines more difficult
- Developing countries have called for a Development Oriented Intellectual Property Regime

## Further Problems: Global Warming

Another arena in which global social injustices are being played out

- Major source of pollution in the North
- Major consequences in the South

## **Discontent with Globalization: Other Values Dominated by Economics**

- Environment sacrificed for short run commercial interests
- Reduced access to life saving medicines
- While no compensation provided to developing countries for environmental services
  - Biodiversity
  - Carbon sequestration
- And no protection for traditional knowledge
- Traditional cultures weakened, and WTO rules make support difficult
- Democratic processes undermined, e.g. by IMF conditionality

## **Discontent with Globalization: Processes**

- Global governance is undemocratic
  - Voice of developing countries not heard
  - But even when it is heard, it is not listened to
  - Dominated by North and by special interests
    - Rules made by advanced nations for advanced nations
    - For their interests, or for special interests within them
  - Problems of global governance highlighted by problems at the World Bank and IMF
  - Governance problems contribute to bad outcomes

- Failures of global governance also reflect failures in “democracy” within advanced industrial countries
  - Special interests dominating national interests
- Problems aggravated by “smokestack structure”—trade ministers meet with trade ministers to decide on trade issues, with little attention to environmental, health consequences
  - Markedly different from way decisions are made within countries

- And globalization, as it has been managed, has undermined democracy
  - Conditionalities
  - Reducing the scope for democratic decision making

*Globalization has made us more interdependent*

*Greater interdependence means greater need for collective action, to act cooperatively*

*Just as the world has greater need for global economic institutions, confidence in these institutions has waned*

## FUNDAMENTAL PROBLEM

- Economic globalization has outpaced “political globalization”
  - Views about democracy, social justice, “social solidarity,” even the “rule of law” change at the border
- Democracies have learned how to temper the market economy, to make sure that most individuals benefit
- But we have not yet learned how to temper the excesses of globalization
  - It has put new demands on the nation state (growing inequality)
  - But reduced their ability to respond
  - Part of the reason is that we have not yet democratized globalization

## **Matters Have Become Worse in Recent Years**

- Cold War made Emerging Markets battle fields
  - Little care about virtues of government (Pinochet)
  - But considerable concern about limiting alienation of people
- With end of Cold War there was a choice
  - To pay more attention to human rights, democratic values, global social justice, fundamental values, OR
  - more willingness to engage in economic exploitation and impose doctrinal policies
- U.S. missed opportunity for global leadership, used new position to advance parochial commercial interests, often in “unilateralist” manner
- Unilateralism especially severe in last six years
  - Further weakens ability to have global democratic cooperation

## **NATURE OF OPPOSITION TO ECONOMIC GLOBALIZATION**

- Not so much to globalization itself but to the way it has been managed
  - Economic values dominating other values
  - Undemocratic processes
- And to the particular set of ideologies that have underlay the policies
  - Market fundamentalism
  - In developing countries, “Washington Consensus” policies

## Change is possible

- Indeed, change is inevitable with changing world
  - new global geopolitics
  - New technologies, New Economy
  - New scarcities
  - Climate change
  - And globalization has set in motion its own changes
    - Rulings that US cotton subsidies are illegal

- Question is only whether we make the changes before a crisis occurs
  - Changes in crises tend to be patchwork
  - Setting in motion another crisis at a later date
- Or we work together today to *Make Globalization Work*, or at least work better

## Reforms that would make globalization work better for Developing Countries

- Trade: A true development round
  - If developed world is willing to commit .7% of GDP to help poor countries, shouldn't they help them also by opening up their markets, to give them an opportunity to earn income for themselves?*
  - Generalized Market Access—expanding and extending the EBA
    - Opening up markets to countries poorer and smaller
  - More policy scope—allowing developing countries to do what the developed countries did to advance their development
    - Asymmetric consequences of subsidies

## A true development Round

- Labor market liberalization as well as capital market liberalization
- Agriculture
- Escalating tariffs
- Non-tariff barriers
- A development oriented intellectual property regime



## Global Financial Reforms

- Debt relief
  - But unless there are more fundamental reforms, debt problems will arise again
  - Shift burden of risk from developing countries
- Reform of the international reserve system
  - Expansion of Chang Mai initiative
  - Implicit foreign aid from developing countries, through cheap loans to hard currency governments, is greater than foreign aid they receive
  - Contributes to global instability

- Environmental responsibility
  - And other legal obligations enforced through International Commercial Court
  - Redoing bilateral investment treaties
    - Limiting scope
    - No longer enforced through commercial courts
- Global competition
  - Enforced through International Competition Authority

- Escaping the Resource Curse
  - Expanding the Extractive Industries Initiative
    - Only transparent payments tax deductible
  - Ending abusive bank secrecy
  - Model contracts, that ensure that developing countries get fair share of value of resources

## Global Warming

- Beyond Kyoto
  - Major achievement
  - But didn't go far enough
- Developing countries need to be compensated for providing environmental services
  - Rainforest coalition—avoided deforestation
- All countries need to be induced to cooperate
  - Global public good
  - Trade sanctions—worked in the case of ozone destroying gases
- Ecological taxes—better to tax bad things than good
  - And more likely to reach agreement than on setting common targets
- Standards

## Foreign Assistance

- More of it
- And more effective
- Assistance has played an important role in the past
- And can play an even bigger role in the future
  - Especially with programs based on the successes of the past—East Asia Miracle
  - And providing more country ownership

Japan, as the second largest economy in the world, has an especial responsibility for making globalization work, including working for developing countries

- And an especial opportunity
- Understands development—because it went through the development process itself so recently
- Understands the need for global peaceful cooperation
- Poverty in developing countries is one of major global problems facing the world
  - Japan has long been committed to promoting growth and fighting poverty in the developing world
  - New organization puts it in a position to do so even more effectively